

秘封道楽 ACT2 ～少女探訪～

ユウマ@

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

秘封倶楽部の2人が紡ぐ、数多くの話。食を求める。

稀にオカルトや、忘れ去られた幻想も。

あるいは2人でのんびりと。

そんな2人の、新たな日常。

※本作は「秘封道楽　く少女達の食探訪く」の続編となっています。

本作だけでも充分読むことは可能ですが前作をお読みいただくとより楽しめるかもしれません。

前作よりもシリアスの比重が多めです。

目次

case 0 秘封倶楽部

プロローグ | 1

変わらぬ日常、波紋1つ | 7

case none

冬の最終兵器 | 13

黒帽子のトナカイ | 20

サカイメマイリ | 28

case 1 目覚メ

瞳に映る違和感 | 35

私達なり、その日に | 41

揺らぎに映る影 | 47

伝統のあるやもしれぬもの | 54

眼前に立つは | 59

case 2 幻想を語るモノ

童子という少女 | 65

夢の少女、現の女 | 69

Who are you...? | 74

まるで地獄のような | 79

瞳に映る毒 | 83

まるで楽園のような | 86

夢の郷 | 91

case 3 背中合わせの視界

休日 | 95

幻想への鍵を | 98

現世の眼	101
夢想の瞳	104
触れられないモノ	110
Case 4. 侵食する幻想	
得たもの、失ったもの	114
かつて、私は。	118

case 0 秘封倶楽部
プロローグ

人には数多くの出会いというものがあるだろう。

勤め先で、学びの場で、あるいは全くの偶然から。そこから得られる経験というのは千差万別で、中には特に色の濃い人間に出会う時もあるかもしれない。

かくいう私も、その1人だ。

たまたま声をかけられた事をキツカケに、私と彼女は私の思いもよらぬ関係へとなってしまった。

その経緯は話すと長くなってしまっているので、ここでは割愛させていただく。ただまあ、覚えておいて欲しいのは。

これから綴る話は、私：マエリベリー・ハーンとその相棒が出会った、または出会うであろう話の、ほんの断片にすぎないのである――



「…何コレ」

「……」

道すがら、隣の彼女が呆れたような声を出す。その視線と、手には私に向けてひらひらと振ってみせる1枚の紙切れ。私はそれから逃げるように、口元を引きつらせながら顔を背けた。

「……出し物、よ。…秘封倶楽部の」

「…メリーって、時々大胆な事するわよね」

トレードマークの帽子を抑えながら天を仰ぐその姿はまさしく我

が相棒、宇佐見蓮子に他ならない。

事の発端は単純だ。

単位を落とす事もなく進級出来そうだと2人で喜び合っていた所を教授に呼び止められた。聞けば、各サークルで新入生を迎え入れるための出し物をするから、案を考えろというものだった。

言うまでも無いかもしれないが、私が属するサークルたる秘封倶楽部は、私と隣の相棒の2名のみ。名目上蓮子が部長という事で、最初は蓮子に丸投げをしようとした。しかしこの相棒、初めて会った時より凶太さを増したのか、2日足らずで怪しげなオカルトスポットを回ったレポ動画を作り上げ、それを新入生の集まる場で流す、などのたまったのだ。

もちろんそんな事を許すわけもなく、私が新たに出し物を考える事と、なりはしたものの。

「だからって、原稿書いてしかも音読って…メリーって人が集まるところで話すの得意なの?」

「いいえ、苦手よ。けど少なくとも、蓮子の動画よりはマシだと思うわよ」

「メリーったらこの動画の良さが分かってないわねえ。未知のオカルトを求めて刺激ある活動をする、それが私達秘封倶楽部の醍醐味ってもんじゃない」

やれやれと言う風に肩をすくめる蓮子に、私はため息を返す。ともかく、人の集まる集まらないに関わらず、最低限の物は作らなければ後々面倒なことになる。

だから今日は、蓮子を家まで引っ張って案を出そうというわけだ。

「えー、私と一緒にいたいならそう言ってくればいいのにー」

「人の心を読まないで。そもそも私は何も言っていないわよ」

視線を向ければ、蓮子は意地の悪そうな顔でこちらを見ていた。

「いやいや、心でそんな事を思ってくれてるなんてね。あのメリーがよ？」

「…っ」

屈託のない笑顔で言われて、思わず顔を背ける。

ここ最近はずっとこの調子だ。何かと口実を作ってはどちらかがもう片方を家に招く日々。一緒がいいなぞ、蓮子に知れたらつけ上がりそうなので口に出しはしないが。

ほんの少し前から、私達は世間一般でいう「恋仲」と呼ぶようなものに、心境だけはなつたと言っても良いだろう。実際には殆ど変わりはないけれど、その想いははっきりと分かって。

けれど、

「そうと決まれば、早く行くわよ！ちゃんと付いてきてよー！メリーしか鍵持っていないんだから！」

「分かったから、あんまり道端で叫ばないの！」

——目の前で笑う相棒には、散々振り回されたから。

恋という一面だけでも、私が蓮子を振り回しても良いだろうと、そう思うのだ。



そうして、私の自室で2人揃ったまでは良いのだが。

「……」

肝心の相棒が着くなり人のベッドにダイブしてしまったおかげで、
実質ここにいるのは私一人となっていた。

こうなつてしまえば、「口実」が全うできる筈もなく。私は仕方なしにインスタントのコーヒーを作りながら、人の寝床で堂々眠る相棒を眺めていた。

最近では、こうして蓮子が時たま眠る事がある。蓮子の事だから、きつと夜までオカルトの事でも調べているのだろう。その趣味をとやかく言うつもりは、もちろん無いけれど。

「……」

こちらに向けられた寝顔を指で軽くつつく。少しだけひやりとした肌が今の時期にはこたえるけれど、それよりも不思議な中毒性のよ
うなものがあつてやめられない。

何度かつつく内に、蓮子は顔をしかめて寝返りを打ってしまった。
私に背を向けて、全身を埋もれるようにベッドに沈めていく。

少しだけ名残惜しく感じながらも、私は指を引つ込めて出来上がった
コーヒーをカップに注いでひと口すすする。……砂糖を忘れて苦い。

それでも温かいコーヒーはそれだけで冷えた身体に染み渡つて、私
はほうと息をついた。

秘封倶楽部は本来、秘め封じられたものを暴くオカルトサークルだと、
ずつと前に蓮子から聞いた事がある。今となつては色々な食べ物を
探したりだとか、それらしい活動など殆どしてこなかったなど、ふ
と思う。

……私の前で眠る蓮子は、その部分をどう考えているのだろう

か。もちろんオカルトに対する興味はさほども薄れていない事は想像はできる。

けれど。それは、つまり——

「ん……」

蓮子が再び、寝返りをうつ。こちらに向けられた顔は、とても安心してきつた顔をしている。

…あまり考えるのも良くないだろう。私は蓮子の髪をそつと撫でると、自分も同じベッドの反対側に、背を向けて潜り込んだ。すぐに微睡みが襲ってくる。

背中に体温を感じる。こんな事も最近は、良くある事。

以前の私なら考えもしなかったであろう。恋と呼べるであろう感情。それを私は、心から嬉しく思う。蓮子と共にいることにかまけて、秘封倶楽部本来の活動を疎かにしてしまうほどには。

けれど、もしも蓮子が、秘封倶楽部の活動を望むなら。私とこうして緩やかに日々を送る事よりも、オカルトを追いたいと言った時には。

——私とのプライベートな時間と倶楽部活動、どっちが大切なの？

そんな問いを投げかけてしまうであろう程度には、私はこの日々

を、刺激のない、穏やかな日常が気に入っているのである。

変わらぬ日常、波紋1つ

講義の終了を知らせる電子音が鳴り響く。手早く机の上の物を片付ける者、めいめい知り合いと話す者。その中の1人である私も、読みかけだった小説に葉を挟んで立ち上がる。

今日は午後は休講の為此のまま帰ってもいいのだが、蓮子は午後も講義があると言っていたし、折角なら昼を食べてから帰ることにでもしよう。

午前ですっかり固くなってしまった背筋を伸ばしながら食堂へと向かう。

中にはすでに多くの学生がいて、けれどその中であっても少しばかり目立つ帽子を見つけて、駆け寄る。

「ん、メリー？この後講義ないでしょ？それとも1人寂しく講義を受ける私にお供でも？」

「そんなわけないでしょ。1人寂しく講義を受ける蓮子の前でお昼でも食べて帰ろうってだけよ」

私の言葉に蓮子は少しばかり恨めしそうな顔を向ける。私にとっては慣れたものなので、さして気にせず昼食を選ぶことにする。今日の日替わりメニューは天ぷらうどんのようだ。特に食べたいものがあるわけでもなかったから、早めに注文を済ませる。

うどんを食べる機会というのが意外と無かったから、今日食べるのが久しぶりのうどんだ。確か以前蓮子に天たまうどんだったか何かを作ってもらった事があつたらうか。

そんな事を考えながら料理を受け取り、手近な席を探す。と、こちらに手を振る蓮子の姿があつた。空きテーブルを確保しているその手には私と同じくうどんがある。私より後に注文した筈じゃないのか。

「私は出来るのを待ってただけよ。あんまりゆっくりしていると講義始まつちゃうから、さつと食べちゃいましょ」

講義があるのは蓮子だけなので、別に私がいくらのんびり食べよう

と問題はないのだが。それはそれでうどんが冷めるから問題かと、私は温かいうどんをすすする。

「そういえば、メリーにうどんを作ってあげた事とかあったわね」

「あら、覚えてたのね」

「メリーが風邪引いて、私が看病に行ったんだっけ？そんな事あれ以来無かったからね」

私は蓮子と違って身体が丈夫なわけではない、むしろ弱い方だろう。大学では随分とマシンになったものだが、蓮子に看病されるというのはなんだかんだで貴重な体験ではあった。今の時代、大抵のことは病院にかかればすぐに治ってしまうようになった。看護師だったり機械に取って代わられているところも多いが、私はそれが少し抵抗がある。故に風邪程度で病院には行ってはいない、という訳だ。

目の前の蓮子はカマボコをつまみながら私の話を聞いていた。表情から察するに、私のことを時代に馴染まない人みたいな事を思っているに違いあるまい。

「まあ、時代が進みすぎるのもアレだけど。昔と違ってAIも進歩した今なら、この暮らしだって悪くはないと私は思うけど」

「別に全部を否定してるわけじゃないわよ」

「分かってるわよ。けど、技術は進化をしても退化はしない。だからこそ、私達だって今のうちに沢山活動しておきたい訳よ。メリーのその古き良きくなく考えもまあ、結構な人が持つてるとは思うしね」

井に浮かぶカマボコをひよいとつまんで口に運ぶ。その形は外に見える紅葉と同じで、けれど外の紅葉もこの食べられる紅葉も、やはり本物とはほど遠くて。今を生きる人間としては、それを少しだけ悲しく思うのだ。私が秘封倶楽部に居る理由も、こんな中で取り残されてしまった物を探したいからなのだろうか？

「そうだ、メリーー！」

顔を上げると、そこにはすっかり井を空にして目を輝かせる蓮子の姿があった。その庄から逃れるように、私は少し身体を引く。この手

の顔をした時、相棒はロクなことを言わない可能性が高い。

「…何？」

「年が明けたら、一緒に初詣に行きましよう！」

「……は？」

また急な。まだ年を越すまで1月以上ある。蓮子のことだから、年を越したらその足で初詣にさえ行ってしまうそうで、そうなるよりはマシなのだけど。

「…蓮子って、神頼みとかするの？」

「いいえ、あんまり。けど秘封倶楽部としては興味あるわね、時代に取り残された神様っていうのに」

「取り残された、ね…」

確かに、今の時代神社仏閣は減少していき、中でも多く残っている方の京都でも年明けにお参りをしようという人はあまりいない。科学が発達して不確定なものを排除されゆく今、最たるものの神社はもう形骸化していると言っても過言ではあるまい。

去年は大学でばたばたしてしまっただけで暇が無かったが、以前は時々ま行っていたものだ。別に信仰しているわけでもないけれど、あつたら行く、程度で。

「それに、今どき神社でお参りする人なんてそういないから昔みたいに人混みに流されたりもしないでしょ」

「なるほどね…行くのはいいけど、どの神社に行くの？祀られてる神様くらいは調べた方が良くないんじゃない？」

「うん？」

それはもちろん恋愛成就でしょ？」

蓮子が驚いたような声を上げる。声が大きい。食堂中からちらちらと視線が向けられる。

「ちよつと、声の大きさ…！」

「何よメリーだったら、今更照れないの」

向けられる視線などどこ吹く風で、蓮子は井を返却すると出口に歩き始める。私も慌てて食器を返し、早足で蓮子の隣に並ぶ。

「…神頼みなんてあんまりしないんじゃないの？」

「信じてないなんて言っていないわよ。信じてないけど」

「じゃあ何で…」

「占いなんかと一緒によ。普段は信じないけど、自分にとって都合のいい時は信じる。皆、そんなもんよ」

「…恋愛成就是、蓮子にとって都合が良いの」

「そりゃあもちろん。メリーだって悪くはないでしょ？」

「……」

軽く頭を振る。悲しいかな、私ではこの相棒を口で丸め込む事は至難の技だ。

「…分かったわよ、恋愛成就ね。ならせいぜい行けるように、今はちやんと講義を受けて来なさいな」

「…メリーって、時々意地が悪いわよね」

「学生の身分でしょ」

「うー、分かったわよ！」

耳が痛いとはかりに大きさにリアクションをしてから、蓮子は講義室へと向かっていった。途中で振り返り、こちらに大きく手を振ってくる。

「元気ねえ…」

それに小さく手を振り返して、踵を返す。と、忘れないうちに端末を起動して、メモに手早く書き込む。

特に楽しみにしているわけでも無いが、万一すつぽかしてもしたら蓮子がうるさい。宥めるのは結構大変なのだ。

帰ったら神社を調べるところからかな、なんてぼやきながら。

私は紅葉の舞う中を、のんびりと家路につくのだった。



少女が2人、建物の中で歩いている。

片方は、黒い少し特徴的な帽子を被った少女。

もう1人は、やや珍しい金色の髪の少女だった。

やがて2人は別れて、別の道を歩き始める。会話までは流石に聞えてこないが、2人がとても、楽しそうなのはよく分かって。

それがとても、微笑ましくて、——見てられない。そつと、目の前の光景を視界から遠ざける。

映像が、ぱきりと音を立てて碎けて消える。視界に映るのは、元の景色。湖を上から眺める、屋敷のテラスだ。

「覗き見？今さら言うのも遅いかもしれないけれど、賢者を名乗ってそれは趣味が悪いわよ」

正面から、声。視線を上げれば、小柄な少女が尊大な態度で優雅に紅茶を嗜んでいた。カップを傾げる度に、背中から覗く羽根が小さく揺れる。

「…貴女のせいよ。貴女があの時、言葉を濁したツケが回って来てるのよ」

「別に、濁して困るのは貴女だけよ。貴女からどう言えば良いかなん

「言われていなかったし、ね？」

くすくすと、少女が笑う。けれどその空気は、嫌に剣呑で。不用意に手を出せば切り裂かれてしまいそうな、鋭さを纏っていた。

「でも、貴女が外を覗き見るなんて…覚悟でも決めたのかしら？それともまた得意の干渉？」

「…いいえ。私はただ、終わるのを待つだけよ。結局、どうあれ世界は同じ道を辿るのだから…。貴女こそ、私を笑うのに、何故彼女を導くような事を？」

空気が、鋭さを増す。けれどそれを気にも止めずに、少女はカップを置くと立ち上がり、ふと外を見上げた。分厚い雲のかかった空に、少女はふと笑みを浮かべて。

その姿が、無数の小さな蝙蝠に変わる。そのまま、吸い込まれるように空へと消えていく。

「別に、大した事じゃ無いわよ？」

声が響く。

「マエリベリー・ハーン…だったかしら。私、彼女は好きだけど…

——妖怪かぶれ貴女って、好きになれないの」

それきり、声は聞こえなくなつて。

その場には、険しい顔をした賢者が1人、残されるだけだった。

冬の最終兵器

「うゝ寒っ…」

「…寒いわね」

隣の蓮子がぶるりと身を震わせる。格好はいつもと変わらずで、冷え込んできたこの時期では流石に厳しそうだ。

季節はもう冬。今年は冷え込みが遅い代わりか急激な温度低下をし、まだ序盤だというのに殆ど重装備で出歩かざるを得なくなっていた。

「蓮子もそろそろコートでも着たら？」

「ちようどクリーニングに出しちゃったのよ…あと少しはこれで行くしか無いわ」

「大丈夫？風邪なんて引いたらベッドで年を越す事になるわよ」

「そこはご心配なく。寒さに対抗するために今日コレを買ってきたんじゃないの」

そう言つて腕をぶんぶんと振り回す。そこには随分と大きな袋が握られている。今日の帰りがけに蓮子を買ったものだ。もつとも通学に使う訳ではないから、風邪をひかない事への回答になってはいないのだけど。

私の手にも、帰り道に買ったコンビニ袋が1つ。こっちは今日の私の夕ご飯になるものだ。

…私達だ。私1人ではない。

少しだけ前を歩く蓮子の更に先には、彼女の家が見えてきた。寒さが厳しくなってきたから家であったかいものでも食べよう、とは数時間前の蓮子の言葉だ。

特に断る理由も無かった為、こうして2人で歩いている。帰る前に

喫茶店で予想以上に時間を過ごしてしまったからだろう、空はすっかり星空となっていた。

「20時36分。夕飯には丁度いい位の時間ね」

ふと、そうぼやく声。けれど蓮子は、時計の類を見ている様子は無くて。時間を確認すると、確かに蓮子の言った通りだった。

こんな事が、最近はたまにある。夜に2人で歩いている時に、何故か時間を正確に言われる事がだ。

私を見ていないうちに時計を見ているのか、はたまた本当に体内時計でも持っているのかは分からないが、それでも決まって、夜だけだった。

「どしたの、メリー？」

「…つくづく不思議ねえって、思ってただけよ」

少しだけ首を傾げる蓮子だったが、その顔もすぐに元通りになる。もう蓮子の家は目前だ。蓮子の謎について考えるのも良いが、そろそろ私は暖をとりたい。

思えば蓮子の家にお邪魔するのはまだ2回目だったか。まだ少しだけ萎縮してしまう私をよそに、蓮子は手早くロックを解除して中に入り込む。

私も続いて、外の冷氣から逃げ込むようにして扉を閉めた。



「はあ〜」

「……」

私の向かいで蓮子が間の抜けた様な声を出す。私も声こそ出さな
いものの、表情は緩んでいるに違いあるまい。

今日蓮子が買ってきたものはコタツだ。今まで使わずに冬でも乗り切ってきたらしいが、流石に最近の寒さには敵わず購入したんだとか。

「いやー、コレは抜け出せなくなるのも分かるわね…暖房とはまた違った良さがあるわ。暖房より上かも」

「そうね…」

私も願わくば欲しいところだが、あいにく十分な置き場が無い。どのみち暖房で間に合っているし。どうしても必要な時はまた蓮子の家に押しかける事にしよう。

「さて、このまま横になってると寝ちやいそうだし…とりあえずご飯にしましょうか」

肩まですっぽり被っていたかけ布団から這い出し、上半身を起こす。途端に冷気にさらされた気がして、再び埋もれなくなる。暖房も機能しているはずなのだが。

「メリーったらすっぴんコタツの虜になってるわね」

「…家では暖房だけで十分よ」

多分、きつと。

そうこうしているうちに蓮子は夕飯として買ったおでんの蓋を嬉々として開けていた。親切にも紙皿までつけてくれたのでわざわざ皿を取りに行く必要もなし。

「メリーは何食べる？」

「んー…適当に任せるわ」

「それが一番困るんだってば…」

ぶつぶつ言いながらもよそつてくれる。渡された皿にはたっぷりのつゆと大根、こんにやくと牛すじ串。

「…卵とかも2人分買ったはずなんだけど？」

「お任せって言ったのはメリーよ」

目の前で件の卵を頬張りながら蓮子がもごもごと言う。飲み込ん

でから話してほしい。続けて2個目の卵。…それは私の卵の筈だが。とりあえず、私も冷めないうちに食べる事にしよう。大根を切つて口に運ぶ。からはつけなかったがそこまで好きではないので良いだろう。

「うん、冬といたらおでんよね」

「後は鍋ね。まあ明日も大学だし、鍋するなら次の日が休みの時にばーつとやりたいわね」

「その前にこの寒さで準備をするのが億劫だわ…」

どうやら自分で思っていた以上にコタツの魔力に取り憑かれている様だ。けれどコタツの中でない上半身はおでんの熱でカバーする事にしよう。暖かい食べ物はこの時期特に身体に染みる。

「そういうえば、こんなにやくなんて殆ど栄養が無いーなんて昔は言つてたと思つたけど。こんな時代になつたんだからそれも少しは進歩してたりするのかしら」

「合成ものが増えたから栄養なんてどれも大して変わらない、が実情かしらね。大学生の懐だと天然の高栄養価のものなんて買えやしないわ」

「それは蓮子が変なオカルトグッズばかり買つてるからでしょ…」
別に天然物を食べたいわけではないが。今食べているものだって私の口からすれば十分に味の染みた美味しいおでんだ。世界の何処かにはこんなものが口に合わない、なんて言う富豪でもいるのかもしれないけど、少なくともそうはなりたくないものだ。

それにしても、だ。買った時は大して気にならなかつたがこのおでん、実際に食べてみると随分と量が多い。というよりも、個のサイズが大きいのだ。さつき食べた大根も普通にイメージするものよりも一回り以上大きい。まだ買ってきた器にはいくらか残っているが、正直今取り分けられた分を食べるので精一杯といったところか。

蓮子もそれは大して変わらないように、少し顔をしかめながら餅巾着と睨めっこしていた。

「むむ…最近のコンビニは量も進歩したのね」

「かもね…余ったやつ、どうする？」

「別にすぐダメになるわけじゃないし、明日食べるわよ。それより、デザートにしましょー！」

言うなり巾着をひと口で放り込んでしまう。私も牛すじをまとめて食べる。お肉は良いものだ、旨味が凝縮されていて美味しい。私はおでんの中のお肉ならソーセイジ派だが、食感的にはこっちの方が良いかも知れない。

私が食べ終わるの見計らった様に、蓮子が冷蔵庫からデザートを持ってきた。そして何故か私の隣でコタツに潜り込んでいる。

「…なんで隣？」

「良いじゃない、私とメリーの仲だし」

「足が冷えてるのよ」

「じゃメリーがあつたためて」

しばしぐいぐいと足をどかし合う。今に限った事ではないが蓮子の方が暖まつてる所に水をかけてくるようなタイプなので油断ならないのだ。以前通学中に人のマフラーに後ろから手を突っ込んで来た事は忘れない。

「まあまあ、良くあるじゃないテレビとか見ながら寄り添ってアイス食べるやつ。アレよアレ」

「…まあ良いけど」

実際に自分がやるとは思っても居なかった。ともかくデザートが熱で溶けるのは避けたいのでさっさと食べてしまおう。蓮子が持ってきたビニール袋をあさる。中から出てきたのは馴染み深いアイスだ。

「雪見だいふくね…福が必要な時期にはちよつと遅いけど」

「家にあつたからってだけよ。カップアイスよりこっちの方が好きだしね」

封を切る。最近は意外と種類が出ているらしいがコレは普通の味だ。よく見る白い大福状のアイスが2つ。

「あつ、じゃあフォーク持ってくるわ」

真ん中にはアイスを刺すためのモノが1つ。多分2人でシェアする事も作る側が想定していない訳はないだろうから、2本入れたやつも販売してほしいところだ。

「わー、待って待ってメリーったら」

「何よ？」

「何よじゃないわよ、メリーだったらこういう時に鈍感よね、精神学とつてるんでしょ？」

「……」

むくれて蓮子が言う。別にまずい事をしたわけでもあるまい。

と、蓮子に座る様に促されてとりあえずコタツに入り込む。そこで私の眼前にアイスがずいっと差し出された。

「ええつと…何？」

「ん？何ってあーんよ、はいあーん」

「いや、自分で食べるから…」

「早くしないと溶けるわよ」

そう言われては口を開くほかない。大口を開けてかぶりつく。独特の冷たさが一瞬広がり、次に優しめなバニラの甘み。よく巷でコタツアイスなんて物を聞くがこう言うことか。確かに何とも言えないモノがある。

私がむぐむぐと食べている間に、蓮子も幸せそうにアイスを頬張ってきた。普段より随分顔が緩んでいる。きつと年末辺りになったらコタツから出てこないに違いない。

「フォーク取ってくるくらいするのに」

「ちがうちがう、私がメリーに食べさせたかったの。シェアよシェア」
「…少し方向性が違う気がするけど」

「何だって良いわよ。こうやってくつついてた方がやりやすいでしょ？あつたかいしね」

ふわふわと欠伸をしながら蓮子が笑って言う。私も少し眠気に襲われている。欠伸をする程でも無いから、軽く身体を伸ばして眠気を飛ばす。

「確かに、暖かいのは同意ね」

「そこだけ？蓮子さんがひつついてるのに？」

「私は私なりの楽しみがあるから、いいの」

私は指を伸ばして、蓮子の口元についていたアイスを拭い取る。こういう所は、意外と子供っぽいところがある。普段は見えないような、些細なことだけど。

「…ついてたなら言つてよ」

「なら、蓮子ももう少し人にちゃんと物を言う事ね。それなら私ももう少し事前に言うことにするわよ」

そう言つて、微笑む。こうして2人でのんびりしている時くらい、私も少しやり返したって良いだろう。ひっそりと楽しむ方が、私は性に合うのだ。

今度同じ機会があったら、先に食べさせてしまうのも良いかも知れない。別にアイスに限ったことでも無いか。

そんな他愛もない事を考えている内に、緩やかに時間は進んでいく見れば、窓の外には静かに雪が降り始めていて。

「クリスマスになったら、あんな街中を歩いてみたいわね」

「そうね。じゃあ、当日に活動出来るようにオカルト調査をしなきゃ！」

「…もう」

そんな事を言いながら、2人で笑いあう。それはやはり、私にとつて最も心が安らぐ瞬間なのだった。

黒帽子のトナカイ

クリスマス。今となってはそれはただプレゼントを贈りあって鶏肉を食べるだけの日に思える。キャンパスの内外問わずカップルが溢れかえり、糖分高めの日を過ぎさねばならないのである。

と、そんな捻くれた考えを持っていたのが去年の事。

いや、別に考え方が変わったという訳ではない。そして鳥を食べるも砂糖をばら撒くのも個人の自由だ。キャンパス内では自重して欲しいとは、思うけど。

さて、何故こんな話をしたかというのは言うまでもあるまい。今日はクリスマス。いつもは1人で積み本消化に励む日。

そんな私にも、いわゆる「クリスマス」の予定なんてものが出来たからだ。

「どうしたのメリー、そんな浮かない顔して」

とても不本意ながら、ではあるが。

時刻は昼時、場所は食堂。私と蓮子はいつもの席に座って、昼食をとろうとしていた。蓮子はもう食べ始めているが、私はどうにも食べる気が起きなかった。

私達の目の前には、巨大なバケツ状の容器がでんと置かれている。

中には、大量のフライドチキンとポテトが詰まっていた。

「注文を蓮子に任せるんじゃないわ…」

「何よー、メリーが任せるって言ったから奮発したのに」

「割り勘でね」

見れば、注文口にデカデカと「クリスマス限定！」の張り紙。日本人は限定の文字に弱いとは聞くが、流石に昼にこんなものを頼むなどとはさすが蓮子というべきか。

「早く食べないと冷めるわよ?」

「頼んだからには食べるけど…これ、食べ切れるの?」

よく見なくても先日のおでんより大分量は多い。けれど蓮子是不敵に笑って、

「メリー、私だって同じ失敗はしないわ。大丈夫、この容器を空っぽに出来るわよ」

「…本当?」

「ええ。ここは大学、私達はもう講義はない。だから同じく講義のない人物…岡崎教授の所に行くのよ」

「……」

つまり丸投げではないか。呆れる私に、蓮子は慌てたように手を振った。

「いやほら、クリスマスといったらチキンでしょ?本当は泊まり込みで色々したかったけど、私が無理だし…丁度いいと思って」

「…まあね」

今日が終われば冬休みに突入する。ならば今日はどちらかの家に泊まってゆるゆる過ごすという話だったのだが。蓮子が明日すぐに実家に帰省するとの事で計画はご破算。その分のクリスマスらしさを出そうという事らしい。その割に大分財布に打撃を負ってしまったけれど。

ともあれ、最近は鶏肉を食べる機会があまり無かった。クリスマスはチキンというのも事実ではあるし、せっかく買ったのだから食べるとうしよう。私も一つチキンを手にとってかじりつく。

思ったより衣が薄い。すぐに鶏肉の柔らかさが伝わり、ほどけて消える。濃いめの醤油味だが、やはりご飯と一緒に食べるにはどこか違う美味しさ。

「蓮子は夜にチキンは食べないの?」

「うーん、夜は主食と一緒に食べたいからね。ご飯にのつけて食べるのも出来なくはないけど、骨あるし」

「だからって骨を噛むのはやめなさい」

仮にも女子大生なのだからもう少し上品というか、綺麗に食べたり

しないのだろうか。無理か。

「メリーこそ、夜に食べるつもりだったの？」

「…貴女がコレを買って来なきやね」

「次は事前に言うわよ。じゃあ夜はケーキだけ？」

「普通に食べるわよ。この後ケーキは食べるでしょう？いつもの喫茶店か何処かで」

「その通りね！」

クリスマスといえばやはりケーキは欠かせない。個人的にはホルケーキを丸ごと一人で食べる贅沢を試みたいのだが、お財布事情と実行した後の代償が怖い年になってしまったので、叶うことはあるまい。普段喫茶店で食べるケーキでもそこそこお腹にはくるし、などとぼやく。そんな私をよそに、蓮子は目を輝かせながら立ち上がった。

「それならすぐ行きましょう！駅の近くに出来たばかりのケーキバイキングの店があるのよ！」

「…太るわよ」

「埋め合わせとして活動するんじゃない、来年からはもっとハードに行くわよ」

…やはり活動目的が段々と変わっていつてないか。前はもつとオカルトを追う不良サークル的イメージだったが、今ではただ食べ歩いていくだけではないか。余計な事に首を突っ込んで何かあるよりは、そっちの方が平和的で良いのかもしれないけれど。

「メリー、早く行くわよ！」

「…はいはい。行くなら、いつもの喫茶店が良いわ」

立ち上がり、蓮子の後ろで食堂を後にする。年末になっても行動力は随分盛んらしい。それについて行く私も、周りから見ればそう見えるのかもしれない。

それでも、まあ。蓮子という事は、存外楽しい事であるからして。それを無下にするような事は、私もしたくないのだった。



「メリーって、サンタはいつまで家に来るものだと思う?」

「…物心つくまで、かしら」

喫茶店からの帰り道。昼間よりも冷たくなった家路を歩きながら、蓮子とそんな話をしていた。ケーキはいつも通り美味だったが、クリスマス風のものが一切無いのは少しだけ気になる所だ。店側としても年に1日だけの為にあれこれするのは面倒なのかもしれない。

「私の家はね、今でも来るわよ」

「……本当?」

自慢げに蓮子が言う。私はと言えば、何かおかしな事を言い始めたなあといういつもの事だ。普通大学生の家にサンタクロースが来るわけなからう。いやサンタクロースが実在する事が日本では普通ではないだろうが。

「本当よ。イブの夜になったら寝る前に枕元にプレゼントをそうつとね」

そう言つて蓮子は鞆からオモチヤの白い髭を取り出した。それから、良くイメージで持っている大きな袋も。

「…自分でやって虚しくならない?それとももうそんな感情も無くなるほどになつてしまつたかしら」

「どっちもなつてないわよ。ただ自分用に物を買うんじや楽しくないじゃない。人間寝る前の事なんてあんまり覚えてないんだし、こうした方が気分は味わえるでしょ?」

「そのうち家にソリでも運び込みそうね」

「むう、メリーつたら夢がないわねえ。サンタクロースの実物だつて

今頃大忙しかもしれないじゃない」

むくれたような声を出す。私は苦笑して、空を見上げた。星は雲に隠れて、あまり見えない。当然、ソリに乗って空を駆ける影も、見当たりはしない。今となってはそれはただ、暴かれるまでもなく無くなってしまうた幻想でしかないのだ。夢がないと言われれば、確かにそうかもしれない。

時間と共に、夢は無くなる。現実にも目を向ける事で精一杯で、とても夢を観ている暇などない。

それは勿論、私もそうで。だから純粹に夢を見る事の出来る蓮子が少し、羨ましい。

「…昔はもう少し信じてたりもしたんでしようね…」

「子供心って大事よ？こんな生き辛い世の中じゃ、特にね」

「そうだとしても、貴女は好奇心旺盛過ぎるのよ」

「褒め言葉として受け取っておきますわ」

そう言っ、蓮子は笑う。私も笑い返そうとして、上手く笑える気がしなくて。そつと、目線を下げた。

ただの雑談だと分かってはいるけれど。

何気ない話だと理解しているけれど。

それでも少しだけ、感じてしまう。思ってしまう。

蓮子はその好奇心と熱量で、私から離れていくのでは無いかと。

私が秘封倶楽部にいるのは、蓮子がいるからで。

あるいは蓮子も、そう思ってくれているのだろうか。

どこまで先があるかも分からない路を、私達は歩いている。その路がずっと続くか、いつか分岐に立たされるのかは、今はまだ分からない。

それが唐突に無くなってしまう可能性だって、なくは無いのだ。いつかどちらかが、足を踏み外してしまっ。

そのまま記憶の中だけに、幻想として風化していつて――

「メリー？」

はつとして、顔を上げる。不思議そうな顔をした蓮子が、私を覗き込んでいて。

どうも考えが暗くなりがちだ。寒いからだだろうか？せつかくのクリスマスだと言うのに、それではあまりに残念だ。

気持ちを切り替えるように頭を振って、鞆を開ける。クリスマスと言えばチキンにケーキ、後はコレだろう、やはり。

「お？メリー、それってもしかして？」

取り出した、丁寧に包装されたそれを私は蓮子に差し出す。

「ええ、クリスマスプレゼントよ。これで一人でプレゼントを枕元に置く必要はもう無さそうね」

「なーんかメリーが言うのと嫌味っぽく聞こえるんだけど…」

流石に知り合いが一人でサンタの真似をしていたら思うところもあるだろう。趣味に口出しすることは無いが、流石に。

「ねえねえ、中見ていい？」

「ダメよ。ちゃんと帰ってからね」

「ちえー。じゃあメリー、ちよつと」

プレゼントをしまいながら、蓮子は手招きをする。そこまで離れたいたわけでもないが、なにかと顔だけを近づける。

と、私の肩に蓮子の手が置かれ。もう一方は彼女の鞆の中に――

「そおーれつと！」

鞆から手が抜かれるや、両腕をぐるりと回転。両手が私から離れた

時には、私は薄紫色のマフラーを身につけていた。

「これ…」

「プレゼントよ、プレゼント。私はサンタだもの」

「どちらかと言えばトナカイの方が向いてると思うけど…ちよつと長くないかしら、これ」

軽く巻かれたマフラーは両端が私の腰まで届くかどうかと言う長さだった。横幅が広いのもあってこれではマフラーというより忍者か何かが身につけるものに思える。

「まあ確かに後ろからついてくるメリーの方がサンタの格好は似合いそうね。で、マフラー長いって？そりやあメリー1人だと長めでしようけど。コレはこういう使い方前提、よ」

言うなり蓮子もマフラーの端を持って首に巻く。2人分を抱えたマフラーは確かに丁度いい長さにはなったが、それはつまり私達も相応の距離になっているという事で。

「ちよつと蓮子、近、近いわよ」

「そう？これくらいの方がお互いを見失わなくて済むわよ？」

「それはそうだけど…あんまり人前でやるものでも」

「相思相愛ですーってアピールよ。それとも部屋でマフラーする？」

「……」

ええい、やはり私は口で蓮子に勝つにはまだまだらしい。蓮子の言うことを否定するだけの材料を、私は持ち合わせていないのだ。

それに。互いを見失わずに済むというのは、まさしく私が考えていたことであるから。

「……ありがとう」

結局、私の口から出てくるのはそんな言葉だけで。けれどそれを聞いた蓮子は、少しだけ目を細めて笑うのだった。

「どういたしまして、よ。じゃあ早速コレを巻いて出かける計画を立てなきゃ！やっぱり手始めに初詣かしら」

「そうね…御守りも買わなきゃ」

それはふっと頭に浮かんだ事だった。特段御守りを買ったことはないくらい信仰心の低い私だが、今日の、というより今までの蓮子を思い返して、ふとそんな事を思っただけ。蓮子に最適な御守りは、何だったか――

「お、良いわねそれ。何買うの、学業成就？それとも縁結びとか？もう結ばれていると思うけど」

なんて早口にまくし立てる蓮子に、小さく微笑んで。

「交通安全、よ」

「ええっ!?!どう言う意味よそれ!」

憤慨する蓮子の熱を、すぐ身近に感じながら。私達は寄り添って、雪の降り始めた道を歩いていった。

サカイメマイリ

「…メリー」

「何？」

「お湯入れてきて」

「…無理」

うー、と唸る声が隣から聞こえる。このままでは事態は進展しないが、あいにく私もここから身動きが取れそうにない。

月日は大晦日。

年越しそばを食べる時間帯だ。

もちろん私達もそのつもりでいた。カップ麺を準備し事前に湯を沸かし、今も変わらず大晦日に流れる歌番組をだらだらと見ながらさあ食べようかという時だった。

長くこたつに籠もっていたのが良くなかったか、足を引き抜くと途端に外気にさらされ、抜くことが出来ない。蓮子も同じなようで、互いに首から上を出したまま固まっているのだ。

しかしそろそろ限界だ。寒さはあるがそれよりもお腹が空いた。夕飯を年越しそばに決めた為、それ以外は殆ど食料がない。あつたとしてもここから動かねば入手はできないわけで。

「ええい…ままよっー」

自分でもよく分からない掛け声と共に、思い切って足を引き抜く。温度差に少し痛みじみた寒さを感じるけれど、どうにかこたつから逃れる事はできた。

そのまま台所まで移動し、カップ麺にお湯を注ぐ。時代と共に進化しているわけでもない昔ながらのカップ麺だが、今の食材とは少し違うジャンクな感じが蓮子のお気に入りなんだそうだ。

「ほら、蓮子も起き上がりなさいな。そのままだと食べられないわよ」
「うー…分かったわよ。やっぱり魔法の道具ねコレは…」

のそのそと蓮子も起き上がり、まだ卓上に残っていたお茶を一息にあおる。私は熱いのが得意ではない為、ちびちびとすすめることにする。

「ところで、この後どうするの？初詣とか行く？」

「うーん、そうねえ…でも今とか初日の出の時とかは混んでそうだし…本格的に行くのはまた今度かしら」

「本格的に？」

カップ麺の蓋を剥がしながらぼやく。昔よりお湯を注いでから食べるまでの時間が短くなったのは利点だ。蓮子は既に七味まで振りかけてうどんを食べ始めていた。

「私達は秘封倶楽部よ？神社なんてそれこそオカルトサークルとして行かないやいけない場所じゃない。幾つか調べて来たわよ」

「…用意がいいわね」

天ぷらののったうどんをすすする。絶賛される程ではなく、けれど美味しくないわけではない、中間くらいの味だ。蓮子が好きそうといえは好きそうな味だ。ハンバーガーとか好きなタイプだろうか。

時計は進み、新年を迎えるまではあとわずか。本来もつと早くに予定は決めるべきだろうが、私はともかく相棒にそんな癖はないからして。

「でしよう？…そうと決まれば、食べたら出発するわよ。夜が明けるまでなんて待ってもいられないし」

「そうね。どうせ初日の出を見たいなんてロマンチックな事は言わないものね」

「さすがメリー、分かっているじゃない」

本当は寝ていたいのが、この年末はつい家にいてばかりだったので運動がてらに行くのも悪くないだろう。

「まあね。…それで何処に行くの？あんまり遠くじゃないんでしようけど」

「えーっとね…」

鞆から紙を数枚出して見比べている。オカルト関係になると急に行動的になるのは悪い癖だと思うのだが。言って治るものなのだろうか。治らなくても私は問題ないのだけど。

「あ、あったあった。そんなに遠くないわよ。」

——博麗神社、だつてさ」

年が明けた、丁度の事だった。



年が変わっても、気温はそうすぐには変わらない。

私達は寒さと戦いながら、木々の茂る山道を歩いていた。

周りは暗い。木々に光が遮られる訳ではなく、単純に夜明け前だからだ。端末のライト機能を駆使して足元と前を最低限照らしながら、私達は歩いていった。

「こつちで合ってるの？」

「多分その筈だけど…。お、アレじゃない？」

光が照らす先には、さほど長くもなさそうな石段があった。相当前からあるのか、所々苔が生えている。先にあるだろう神社本体は、まだ見えない。

「いかにも、って感じね。蓮子、お賽銭持つて来た？」

「こんな所に神様なんて居るのかったのはあるけど。ま、やらずに祟られても嫌だしね」

軽く話しながら石段を登っていく。運動不足が祟っているのか、蓮子よりいくらか歩みが遅い。白い息が口から結構な頻度で出ている。それでも石段の短さが幸いしたか、直ぐに色あせた鳥居が見えてきた。

「もうちよつとね！折角なら神様でも出て来てくれないかしら？」

「さ、さあ…。というか蓮子、ちよつと待って…」

「メリーったら。今後は運動しとくのよ？」

訂正、思ったより短くはなかった。変に勢いづいて息も絶え絶えな私は、蓮子に手を引かれてどうにか鳥居を跨ぐことが出来た。

ふと、身体に違和感。気づいた時にはもう感じなかったけれど、鳥居を抜ける時に言いようのない“何か”を感じた…：ような気がする。それとも単に気分と場所から来る思い込みだろうか？

「うわあ…：予想以上にボロボロね…」

蓮子のぼやきに見回してみれば、確かに境内は荒れ果てていた。本殿も朽ちかけていて、この様子では御神体なども恐らくあるまい。

「こんなんじや、神様だつて居なさそうだけど。お参りくらいはしとく？」

「んー…：そうね。もしかしたら祈ったら現れるかも知れないし」

「あはは…」

どこの時代の話だ、それは。祈りで神が降りてくるなら今ごろ日本は神様だらけの国に違いない。ただでさえ八百万の神などといって母体が多いのだ、変に降りて来られられても逆に迷惑だろう。

本殿の前に置かれた賽銭箱の前に立つ。お参りの時に鳴らす鐘は錆び付いていて鳴りそうな様子はない。下手したら鳴らそうとして落ちてくるかもしれない、そんな危うさだった。

「お賽銭やつてお祈りだけになっちゃうわね：メリー5円玉ある？」

「ご縁がありますようにって？信仰心があれば金額はいくらでも良いらしいわよ」

「逆よ、逆。信仰心が無いから語呂合わせの金額で場を繋ぐのよ」

「：言っているの？それ」

やれやれと首を振って蓮子に小銭を手渡す。かくいう私も信仰深い訳では無いので、蓮子に倣って5円玉を供える事にする。

ひよいと5円玉を投げこむ。それから手を合わせようと目を伏せて。小銭が賽銭箱の底を叩く音が1度、響いて――

身体に、強烈な違和感が走った。地に足をつけている筈なのに、踏みしめる地面の感覚を感じない。身体が浮遊している様な感覚に思わず、目を開けて。

そこに、赤を見た。

朽ちてなどいない本殿の前で、紅白の巫女服を纏う誰か。背を向けている為、顔は見えない。けれどその人からは、何とも言えない不思議な感じがした。

はっとして隣を見る。蓮子の姿は、ない。

「あ、あのー！」

咄嗟に、私は彼女に声をかけた。
帰らなければいけない、と思った。

ただの直感。けれど私は、その直感に何よりも、恐怖を感じた。

「――」

ゆつくりと、彼女が振り向く。その奥には、もう1人人影。途中で
見えた口が、何かを呟く。その言葉に、私は耳を傾けて――

「メリーったら!!」

そこで、ぶつりと視界は色を失った。目の前には朽ちかけた神社。
声の方向に顔を向ければ、少し怒ったような顔をしていて。

「あれ…私…?」

「いつまでお願い事してるのよ。夜更かししてるからって祈りながら
寝ちゃったら意味ないわよ?」

「……」

寝ていたわけは、ない。夢と言うにはあまりにもリアルで、私は確
かにそこに居た…居た筈だ。

「メリー、聞いてる?」

「え…ええ。ごめん蓮子、もう少し待って」

もう1度目を伏せる。けれど今度は、違和感など微塵も感じなかつ
た。

…本当に寝ていたわけはないのだが。もう起こらない事をあれこ
れ考えるのも困りものだ。考えるにしても、帰ってからにしよう。

ずっと居るには、少しばかり肌寒いのだ。

そうとなれば、さっさと願い事でも唱えるところ。手を合わせて、祈るように。

「……………」

願い事など、決まっている。口には出さずとも、隣にいる彼女との事。

けれど、それが。

ほんの一瞬だけ、妙に希薄に思ってしまったのは——これも、私の気のせいなのだろうか？

瞳に映る違和感

「巫女服の女の子を見たあ?」

「そう…なのかしら」

「本人が疑問形でどうするのよ」

思ったよりも長かった休みが明ければ、当然ながら再び講義の日々が始まる。それらをそこそこにこなしながら、私は初詣で見た光景について蓮子に話していた。

「うーん…博麗神社にまつわる古い話ってさっぱり見ないから私もよく分からないけど。少なくとも巫女さんが居れるような立地じゃなかったわよね」

「じゃあお賽銭を投げたから神様が見えたとも言えるの?」

「同じ場所と同じことをした私には見えなかったのに?」

「日頃の行いでしょ」

長めの説明で乾いた口を紅茶で潤す。あの日何が見えたのかは、2人であれこれ話したところでまるで分かりはしなかった。本当に神様が見えたのか、はたまた悪霊でも封印されていたのか。私が白昼夢を見たという可能性もまあ、ないではないのだが。

「でも確か、前にもあったんでしょ? 同じような事」

「ええ…。あの時は眠っている時だけだから、夢だとは思うけど…」

以前にも、確かに妙な夢を見ることはあった。けれどそれはあくまで夢、ただの夢だ。けれど起きている時にまで妙なものを見るのは、正直勘弁してほしいところである。蓮子ならむしろ喜びそうな気がしないでもないが、私はそこまで図太くない。

「幻覚見るほど疲れてるって様子でも無いし…じゃああれよ、あの神社のご利益!」

「ご利益う?」

「そうよ! 神様が私達に不思議な力を与えてくれたのよ!」

「でも、蓮子には何もないわよ?」

「……………ひ、日頃の行い? そんなあ」

先ほどの私の言葉を顔を引きつらせながら復唱した後、蓮子はぐったりとテーブルに身体を預けてため息をついた。オーバーアクションである事は手でケーキを探るフォークの動きで分かる。

「さっぱり分からないわ: 誰よ、科学世紀になって治らない病気はないなんて言ったの」

「勝手に病人扱いしないで欲しいんだけど?」

「夢遊病つてあるでしょ?」

「夢見ながらふらふらしてるって? そんな事してないでしょ」

夢の中ではふらふらしていた時もあったが、まあそれはそれだ。最近はその夢を見る事もないし、至って普通だ。

「いやいやメリー、自覚ないでしょうけど側から見てた私から言わせれば貰えば結構変よ? 見るからに異邦人つて感じでオカルト追っかけるとことか特に」

「え、今日奢ってくれるの?」

「ごめんなさい今月バイト少ないから勘弁してください」

「なら言葉遣いには気をつけることね」

私は紅茶しか頼んでないため仮に奢ってもらおうとしても大した額でないがそれでもこの反応ならよっぽどお金がないのか。アルバイトの給料を何に使っているか知らないが、まあ蓮子の事だからきつとオカルトグッズでも買っているのだろう。

そこでふと、気になった。数少ない蓮子をからかえるチャンスではないか?

「ねえ蓮子、貴女どこでアルバイトしてるの？」

「んー？ここよ、ここ」

「ここって…カフェ？うちの大学の？」

そうそう、と蓮子は頷いて、財布から一枚のカードを取り出した。私の見たことのない黒色のカードには確かに大学のマークが描かれている。

「これを使えばメニューに割引かかるのよ。こここのバイトの特権ね」

「へー…じゃあ蓮子が働いてる時に行くわね」

「良いけど…サービスとかはしないわよ？」

「良いわよ別に。普段見れないような蓮子を見たいだけだから」

「なあっ…」

「？」

「…何でもないわよ」

そう言っつて帽子を目深に被ってしまう。と、丁度のタイミングで昼休みの終わりを告げる電子音が響いた。この後は2人とも講義だ。向かう方向も別々なので、蓮子とは一旦ここで別れる事になる。

食器を返却し、カフェテラスから出る。話しながら無意識に猫背気味になっていたのか、背筋を伸ばすと軽く痛みがした。

「じゃ、私はこっちだから。また後でね、メリー」

「ええ、分かった——」

蓮子の声に、振り向いて。その視界の端に、何かがちらりと映った。

咄嗟に目だけを動かしてそれを探す。そうしなければいけない様な、そんな気がした。

すぐに、それは見つかった。本来なら何もない、ただ壁があるだけの場所。そこは補修でもしたのか、少しだけ他と違う色の壁で。

その壁には小さく、しかしはつきりと認識出来る程の大きさの、ヒビが入っていたのだ。普通のヒビでは無い、少しだけ滲み出るような、人工的なヒビが。

「メリー？」

「…あ、ごめん。あの壁…」

首を傾げる蓮子に、その壁を指さす。蓮子はすぐに分かったように、ああと手を合わせた。

「ああそこね。理由は分かんないんだけど冬休みの間に事故か何かあったらしくて。昨日補修が終わったばかりらしいわよ？」

「……………そう」

蓮子には、このヒビが見えていないのか？

補修が終わったばかりでヒビが入るはずもないし、それを不思議に思う人が居ないなどという事も、ある筈はない。

それを言おうとして、口を閉じる。代わりに私は壁に背を向け、講義室へ向かって歩き始める。

「じゃあ、終わった後にね。講義中に寝たらダメよ？」

「はいはい、分かってるわよー」

不服そうな蓮子の声を背で聞きながら、私は早足でその場から遠ざかっていく。

本当は、蓮子に言うべきだったのかもしれない。けれど、私が言わなかったのは。

ほんの微かに、そのヒビが脈動したような、そんな感覚を覚えて。本能的に遠ざかる方がいいと、考えたのだ。

「……まさかね」

蓮子との話に少し引っ張られすぎたのだろうか？それとも本当に幻覚の類？判別のつかない感覚を抱えたまま、私は無機質な廊下を一人歩くしかなかった。



屋根の上に立ち、前方にある筈の地を見やる。本来なら神社があるであろうその場所は、濃霧に阻まれて見ることは叶わない。

別に、珍しいことでもない。

ごく一部以外は、皆この濃霧がかかったままだ。

私の住処たる真紅の館と、夜雀の引く動かない屋台。見えるのは、そこだけだ。後はもう何が起こっているかも分からない。

「咲夜」

ひと声呼ぶと、いつも通り私の少し後ろに気配。振り向く事なく、私は口を開く。

「紫は？」

「姿は、どこにも。恐らく自分の住処に帰ったかと」
「そう…。」

「お嬢様。先程話されていた事…妖怪の賢者とハーン様、何か関係があるのですか？」

僅かに困惑した様な声に、どう返したものと空を仰ぐ。私も、直接何かを聞いたわけではない。けれど私の主観で言うならば――

「あの2人はね、因縁の相手ってやつよ。紫に言わせればね。運命の紅い糸なんてもので結ばれてるであろう、ね」

「赤い糸…ですか」

「ええ、そう。」

その紅は、もしかしたら返り血にでも塗れているかもしれないわよ？」

私達なり、その日に

「…もうこんな日なのね」

「んー？」

部屋から間延びした蓮子の声。かくいう私は、冷蔵庫に雑に貼った今時珍しい紙のカレンダーを見てため息をついていた。

2月14日。所謂バレンタインというやつだ。

去年は互いにチョコを渡し合ったのは覚えている。それほど量を作る訳でもないから、やる気がないという訳でもないのだが。最近はこちらかの家にいる事が増えたため、単純に作る時間がない。

「何してんのさつきから？…ああ、バレンタインね。今年はどんなのくれるの、メリー？」

「その前に蓮子がいるから作る暇が無いんだけど？」

「大丈夫大丈夫、私も手伝うからさ」

「そういう事じゃなくて…」

相変わらず肝心なところで空気の読めない。そも先程までバレンタインなぞ全く意識していなかったため、作るにせよモノがない。買い出しに出ても良いのだが、当日になって材料が売っているかは甚だ疑問である。

「んー…じゃあメリー、ちよつと買い物行ってきて良い？」

「え？良いけど…何買うの？」

「ん？何ってそりゃあ…」

もともとぞとコタツから出てきた蓮子は、不敵に笑って見せて。

「すぐできるバレンタインらしいものを買いに、よ」

ただ、そう言った。



年も明けいくらか経ったものの、未だに暖かいとは言えない温度。そこそこの賃貸だからという事もあるかもしれないが、ともかく長く台所に立つのは遠慮したい訳で。そういった点では、蓮子の買い物はありがたいものだったと言えるだろう。

台所に広げられたのは大量のチョコレート、それに果物。加えてお菓子などが数種類だった。

「よし、じゃあ作るわよ。メリーは果物切つといてー」

「はい」

とはいえ切るものは大してないのだけど。何故かイチゴが多いおかげかせいぜいパイナップルくらいだろうか。既に半分にカットされたそれを更に一口大に切っていく。隣の蓮子はチョコレートを刻む作業をしていた。ちよこちよこつまみ食いしているのはまあ、良しとしよう。

切り終わったら鍋に牛乳を入れて火にかける。この牛乳は私の家に最初からあったやつだ。あってもシチュー位にしか使わないから、良い機会と言えば機会かもしれない。飲んでも背は伸びなかった。

「チョコは切れたー?」

「もちろんよ。後はコレを入れるだけ、と。…ちよつとだけ食べちゃだめ?」

「刻みながら食べてたの見てるわよ」

「うっ…」

火を弱めてチョコを少しずつ投入する。ゆっくり混ぜながら溶かしていく。後は全て溶かし切るまで混ぜるだけだ。温められたチョコ

コレートの甘い香りが台所に広がってゆく。

「蓮子は切ったやつ先に持って行って。後コンロの準備もね」

「はいはい、お任せあれー」

「果物のつまみ食いはダメよ?」

「私はどれだけ食い意地が張ってると思われてるのよ…!」

さつき食べてた本人に言われる事ではないと思うのだが。

鍋にはもうなみなみチョコレートが溶けている。けれど刻まれたチョコはまだまだ尽きる気配がない。鍋が小さかっただろうか? しかし今使っているものより大きい鍋は持っていない。仕方なしにチョコをボウルに移してラップをかけて一旦冷蔵庫にしまっておく。

「お、きたきた。こぼしたりしないでよー?」

「掃除が大変なもの、そんな事しないわよ」

フォークを手に目を輝かせる蓮子に苦笑を返して、用意されたコンロに鍋をのせる。弱火なら焦げ付く事もないだろう。

「さて。じゃあ出来たわけだし、始めましょうか?」

「ん、そうね。秘封倶楽部流、バレンタインデーをね!」

言うなり蓮子はイチゴにチョコをくぐらせて頬張った。私はどうしようかと目をやって、近くにあったマシユマロでやる事にする。僅かに湯気を立てるチョコにさつと投入し、一口。

「んむ…甘い。…ってこれ、中身もチョコじゃないの」

「あれ、そうだった? 味何種類か買ってきたからどれがどれだか分からないのよねー…」

まあ全部食べるから全部分かるでしょ、と自分もマシユマロを食べながら笑う。つられるように私も笑って、果物にフォークを刺していく。

こういったフォンデュのような食べ方をするのは初めてだったのだが、なるほど確かに美味しかった。
というよりも甘い。

甘いものは勿論好きだが、これは俗に言う甘党向けなのかもしれない。食べた後暫くチョコは遠慮しておこうかとなるような感覚。それを果物なんかがある程度中和しているからそこそこの量も食べられるのかもしれない。プレッツェルなんかのお菓子もあつたが、蓮子はそのまま齧っていた。口直しのつもりらしい。

「ねえ、メリー」

「何？」

「楽しい？」

不意に、蓮子がそう聞いてきた。大して意識もしていないであろう、軽い問いかけ。それに私は、少しだけ意地の悪い笑いで答えた。

「うーん…あんまり？」

「ええっ!？」

「だってバレンタインってチョコを贈る日だし。これなら喫茶店でも出来そうじゃない」

「それはそうだけどー…」

むむむと唸る蓮子に笑みをこぼして。蓮子の手にあつたプレッツェルをひよいと取ると、そのまま口に放り込む。

「冗談よ。バレンタイン云々はそうだけど、楽しくなかったらやっつけないし。こういうのも年頃の女の子感があつて良いわよ?」

「…そうよね。メリーつたらそういう事はスツパリ言うものね」

「そうそう。蓮子の困り顔を見ただけでも、それなりに価値あるイベントだわ」

「それはひどくない!?!私別にメリーを困り顔にしてるわけじゃないじゃない!」

「…やっぱり楽しくないかも」

そんなやり取りをするうちに、用意した果物やお菓子はすっかり無くなってしまった。たっぷり用意したチョコレートも、鍋の中から消えている。

「ふう…結構量があったわね」

「チョコはまだまだあるんだけどね…。一体どれだけ買ってきたのよ？」

「んー？そんなに買ってきてないわよ。確か…板チョコ10枚？15枚だったかしら？そのくらいよ」

「…2人で消費するには骨の折れる量ね…」

鍋を洗いながらぼやく。結構な量を使ったつもりなのだが、それでもまだまだだ。

と、蓮子が冷蔵庫からチョコを出していた。同時に自分の鞆から何やら取り出している。見れば、ハートやら星やらの数種類の型だ。

「…何それ？」

「何って型よ。バレンタインでチョコは食べたけど、それだけじゃね。バレンタインはチョコを贈る日、でしょ？」

「…最初から多めに買ってきたわね」

「ご明察。ささ、メリーも手伝って。型は好きなの使って良いからさ」

またチョコ作りをする羽目になるとは流石に思っていなかった。というか、蓮子は何とも思っていないようだがこういうものは何を贈るか秘密にしながらやるものではないだろうか。当の本人は気にも止めずに準備を進めているのだが。

「去年はお互いサプライズでチョコ渡さなかったかしら？」

「去年はね。もう1年経つもの、スキンシップの一環ってやつよ」

「スキンシップって…」

「あーもう、つべこべ言わない！」

強引に遮られる。勢いそのまま、蓮子はチョコをかき混ぜていたヘラをこちらにびしりと突きつけた。

「私は好きな人と隣で作業したいの！そういう人間なの！だからそのくらいメリーが…あー……！」

途中から顔を背けて、ヘラをふらふら彷徨わせながら、蓮子は捲し立てる。そんな蓮子を見るのが、なんだかとても面白くて。

——やっぱり、蓮子に口で勝つのは難しそうだ。

そんな事を、思うのだ。そんな所も、勿論蓮子の良い部分だ。

「と、とにかくチョコ作るわよ！」

「はいはい、分かったわよ。チョコを持つてるのは蓮子だもの、早く溶かしてくれないと」

「…なんだか上機嫌になってない？」

「ん、まあね。私も一緒に作業したいって思う位には蓮子のこと好きだから、ね？」

「うー……！」

悔しがる蓮子の顔も良いものだ。そんな顔を見せてくれるほどには、私達も仲がよろしくなったよう。

それが少し、いいやかなり…嬉しくて。私はハートの型を手に取りながら、蓮子に見えないように小さく、微笑んだ。

揺らぎに映る影

バレンタインも無事に過ぎ、余ったチョコレートも、少々無理はしたものの全て捌き切り。私達は少し早めの春休みに突入し始めた。

以前なら本の消化程度しかしない長期休みだが、今は蓮子が家に居座る時間が増えてしまった。蓮子も読書をしないわけではないけれど、私達が同じタイミングで読み始める事はあまりない。大体は、私が読んでいるときに蓮子がちよっかいを出してくるのだ。

「ねえねえメリー」

「何？」

「今日夜ヒマー？」

「読書で忙しいわね」

「じゃヒマね。ちよっと面白いものを見たのよ」

どうやら蓮子にとって読書は用事に捉えられないらしい。もつとも、本当に何かしら用がある時以外は大体同じ反応が返ってくるので、慣れたものだ。

「で？今度はどんなデマつかまされたのかしら」

「最近ちよっと収穫が良くないからってひどくない？それに今回はそれを実際に体験したーって人も多いのよ？」

「体験って…」

どうやら怪しい幽霊話というわけでもないらしい。いや、どうせ蓮子が独自に調べただけでは…と言うより、今時ネットに流れている情報はあまり信ぴょう性の高いものではない。事実私達もこれまで蓮子が見つけたいくつもの噂に振り回され、結果何も収穫はなかった。

「何か失礼な事考えてない？」

「いいえ全然。それより何を体験できるって言うの？」

そう聞くと、蓮子は待ってましたと言わんばかりに端末の画面をこちらに差し出した。

そこに映っていたのは――

「ふふん、聞いて驚きなさい。今日行くのはね……」自分の未来が映る屋台「よ」



曰く、それは深夜、人の通らないような路地裏に現れるという。その屋台に自分の所有物を投げ込むと、自分の将来が映し出される――

「…なんとも、信ぴょう性の薄い話ね」

「そう言いながらもついてきてくれるメリーは嫌いじゃないわよ」

「行かなかつたらうるさいじゃないの、貴女」

時刻は草木も眠る丑三つ時。星もない暗い道を、私達は懐中電灯一本で歩いていった。

「何でも好きな人がいる女の子がそれに遭遇して試したら、好きな人と一緒にいる姿が映って告白しようってなったそうよ」

「へえ…その通りになったって?」

「そしたらダメだったんだって。それに怒って別の日にもう一度試したら今度は1人でとぼとぼ歩いてる姿に変わっていたらしいわ」

「ええ…アリなの、それ?」

「そりゃアリでしょ。将来いつそうなるかなんて分からないもの。それに将来なんてこれからいくらでも変わるものよ」

…そういうものなのだろうか。確かにその女の子がその後恋が実現する可能性はあるわけで、それでも少しこじつけじみている気もする

が。

道はどんどん暗く狭くなり、懐中電灯の光で横を全て照らせるほどになってしまった。蓮子が言う屋台が現れるにはもってこいの場所だ。

懐中電灯を歩く先へと向ける。まだまだ道は長いのか、光は先に吸い込まれて照らしてはくれない。

ふと、蓮子が足を止めた。私もつんのめるようにして立ち止まり、蓮子の肩を軽く小突く。だが蓮子は首を傾げて微動だにしない。

「ちよつと、どうしたの？」

「しーっ。…前から何か聞こえない？」

蓮子の言葉に耳をすます。

…確かに何かは聞こえる。微かに、しかし次第に大きく。

「…こつちに来てない？」

「そう…みたいね。お目当てのモノだといんだけど」

そう言う間にも、音は近づいてくる。普段は耳にしない異音が、ゆっくりと。

ぎい——

ぎい——と。

錆び付いた車輪を無理に回しているような、耳につく音。光に照らされて、私達の前に姿を現したのは——

「…蓮子が言つてたのつて、コレ…よね」

「ええ…。流石にここまでとは思つてなかつたけど」

それは確かに、屋台のような形をしていた。しかし屋根のようなものは付いておらず、本当に車輪のついた棺桶じみた、不気味な屋台だった。その不気味さを一層強めているのが、外観だった。

錆び付いた車輪に、朽ちかけたぼろぼろの車体。長らく雨に打たれたように、少しの衝撃でも崩れてしまいそうな脆さを感じさせる。この時代にこんなものが走つていては即解体だろう。

「それで…どこに何を投げ込むの？」

「うーん…あ、この中じゃない？」

蓮子が指したのは屋台の上面。色褪せていて分かりづらいが、そこは両開きの扉のようになっていた。

「…じゃあ、開けるわよ？」

「…ええ。流石にこんな狭い中からホラー展開はないでしょうし」

「言霊つて知らないのメリーつたら…」

扉に手をかけ、ゆっくりと引く。軋んだ音を立てながらも、扉は崩れる事なく開いた。その中は、果たして。

「……………水？」

「…水、ね」

中は全て、水で満たされていた。外観にそぐわない、透き通った水。それが、この屋台の全てだ。しかしこんなぼろぼろの木製屋台に水を満たして平気なものだろうか。

「ねえメリー、見てよこれ」

「何？水以外に何も無いわよ？」

「そうじゃないわよ、この水の中よ、中」

はて、中とな。眺めていると、蓮子のいうことに私も気づいた。

中は、木材などではない。水に手を入れ、屋台の側面に触れる。冷たい感触。木とは違う、凹凸のない平坦な壁。

「金属、ね」

「そうよ、多分屋台の内側はほとんどそうね。ぼろぼろなのは見かけだけって事よ」

蓮子は先程までとは違い大層つまらなそうに言う。無理もないか。見た目以外は普通に現代の科学が用いられているのだろう。詳しく中を見れば自動操縦装置でもついているかもしれない。どっちにしてもコレは怪しい屋台などではなくその皮を被った一種のジョークじみたものだろう。またしても蓮子はガセをつかまされたというわけだ。

「…とりあえず、自分の未来とやらが分かるか試してから帰りましょうか」

「あ、一応試すのね…」

言うなり蓮子はポケットからハンカチを取り出して、水に投げ込んだ。ハンカチは静かに底に沈み。

ただ、それだけだった。蓮子の未来など映し出してはいない。

「……」

「諦めなさい蓮子、また次があるわよ」

「だってー！…このところ何も無いじゃないの!!」

「不思議な事がないっていうのは良いことよ」

「そんなのつまんないじゃない！はー…さつさと帰りましょ！」

言うだけ言って、蓮子はずんずんと歩き出す。それについていこうとして、私は屋台を振り返る。ポケットに何か投げ込めるものはあつただろうかと探ると、硬貨の感触があつた。どうせ回収するわけでもなし、私はそれを屋台に投げ入れた。

水面が揺れる。硬貨は沈み、それで終わり。水面に映るのは、覗き込む私の姿だけ。いつもの服装に、大きなリボンの付いた帽子——
「ん？」

はて、私の帽子にリボンなどついていたらどうか。帽子をとつても、やはりそんなものは無い。もう一度水面を見ると、リボンは映つてはいない。

：夜中に歩いて疲れているのだろう。そもそもこんなモノは大抵がガセネタだ。真面目に考えるのもある種バカバカしい。蓮子に言うと確実にめんどくさくなるので言わないが。

「メリー？何してるのー？」

「あ、今行くわ」

蓮子の元に駆け寄り、並んで歩く。来た道を辿れば街灯があるため、懐中電灯に頼るのももう終わりか。

その光の先に、ふと人影。私達より少し高いその人影がこちらに向かってくる。よもや本当に何か出たかと思つたが、特に幽霊といった感じもない。

そのまま人影は私達の横を通り過ぎていった。視界の端にちらりと白衣のようなものが見える。白衣を着て外を出歩くとはなんとまあ。

「ねえねえメリー、今の人見た？」

「何？幽霊っぽくは無かつたわよ？」

「あの人の頭よ。私と同じ帽子かぶってたのよ、珍しいことに」

それは確かに珍しい。もちろん同じ帽子が売っているのはしばし

ば見たことがあるが、

「蓮子と同じセンスって事ね……なんだかねえ」

「何がなんだかねえよ、何が。ファツションセンス疑ってるの？」

「別にー」

いつの間にか街灯の増えた道を、私の家に向かって歩く。蓮子の家とは逆だがこの足取りではどうせ泊まるのだろう。

足を動かしながら、ふと考える。先ほどの人が私達にすれ違ったと言うことは、あの屋台にぶち当たるわけで。もしかしたら蓮子と同じ話を見てやってきていたりするのだろうか。

「まさかね」

そこまで蓮子と一致してしまえば、一周回って狂人だ。本人は狂人と思っていないところも含めて。

そんな不躰な思考を悟られないように、足早に帰路を歩くのだった。

伝統のあるやもしれぬもの

「ねえメリー」

「んー？」

「次の岡崎教授の講義私の代わりに出てくれない？」

「なんでよ、自分で選んだ講義でしょ」

「そうなんだけどさー…」

講義が終わり大学の門を越えたあたりで、蓮子は唐突に口を開いた。その口ぶりは講義そのものが面倒という訳ではなさそうだが。

「選んだのはそうだけどさ、私は教授がいるからとった訳で」

「あら、教授でも変わるの？」

「んーん、変わりはしないわ。ただ次の講義は外から人呼ぶつて言うからさ」

ああ、なるほど。何の因果かは知らないが、うちの大学で外から招く講義は言つてはなんだがあまり質がよろしくない。ましてや大学内でもやや特殊な目で見られる岡崎教授が招くとなればまあ、何が起るか予想はつかない。

「というか、今岡崎教授つて何の講義してるの？」

「んー？怪しげな薬品使つて超常現象を起こそうとしてるわよ」

「ええ…そのうち爆発しそうね、それ」

「何度かアニメみたいな爆発してるわよ、もう。まあ内容はともかくとして、面倒な試験もないし出席だけで単位とれるのが良かったのに…」

なかなか腐った根性をしているなあとは、共に過ごす身なので度々思つてはいる。同時にそれが根治するようなものでもない事も、多少は理解しているつもりだ。

「で、代わりに出てくれないの？」

「だから無理よ。岡崎教授ならその場で貴女を呼び出すように言われたりしそうなもの」

「確かにメリーが目立つのはちよつとねえ…」

そも蓮子がしつかり講義に出ればいいのであつて。けれど本人はそんな事を気にしている素振りはないさそう。唐突に端末を操作しだすと、この周辺の地図を私に見せてきた。

「ところでメリー、この後暇？」

「いいえ、ちよつと夕飯の仕込みを」

「オツケー暇ね。じゃあちよつと行きたいところがあるんだけど」

これである。流石に慣れてきたし、どうせ今日も家に泊まる気であるだろうから出かけても問題ではないのだが。

「…それで、何処に行くの？近くならそのまま行っちゃう？」

「ええ、近いわよ。メリーの家の近くの路地、あそこに自販機がたくさんあるのよ」

「自販機？いつもの喫茶店でも行く？」

「いやいや、飲み物の自販機じゃないのよ。そこはね…お菓子が格安で手に入る自販機なのよ！」

はあ、お菓子とな。私としては喫茶店でケーキを嗜む方が良いのだが。蓮子は嬉々として小銭入れを握りしめて歩き出している。私は何を言う暇もなく、その後についていくしかなかった。



そうして歩く事暫くして。私達はその自販機があると言う路地を目の前にしていた。

「ん、地図によるとここね」

「とうにかまた路地なのね…」

以前に屋台か何かを調べに行った時も路地を歩いた覚えがある。

あの時は夜中だったので懐中電灯で照らしながら歩いたが、今日はただ夕焼け空のため普通に歩く事ができる。だからその路地にひっそりと置かれていたそれを目にするには、充分な明るさだった。

「これが…自販機？」

「少なくとも形はそうよねえ…」

私達の前にそびえるのは、いかにもSF風といった見た目をした自販機らしきもの。商品ケースや通貨を入れる所などは変わりないし、電気もついているので機能はしているようだ。

そして、その中身は。

「確かにお菓子といえばお菓子だけど…こんなの私食べた事ないわよ？」

「私もよ…もつと近代的でオシャレな物だとばかり」

そこに並んでいたのは昔ながらの棒状のチョコレートやスナック菓子らしき袋など、いわゆる駄菓子などと呼ばれていたものばかり。今のご時世意外と値が張るものでもある。

「値段は…そこまで高くないわね。というかむしろそこら辺のお菓子より安いわ」

「そうね。とりあえず、少し買ってみましょうか」

硬貨を入れて、丁度真ん中にディスプレイされていた棒状のスナック菓子を購入してみる。ラベルに書かれている商品名は「ウメー棒」らしい。軽い音を立てて落ちたそれを拾い上げる。

「私はこれ、つと」

蓮子を選んでいたのは何やらゼリー状のお菓子だった。私の菓子の包みを開けると、ほのかにコーンの香りがするスナック菓子にかじりついた。

「…んー？」

味はまあ、ぎっくり言ってしまうばコーンポタージュの味だ。ほんのり甘い味とスナックの軽い味でどんどん食べられる。気づけばもう2、3本購入していた。

「何、メリーったらハマったの?」

「ケーキ1つ分までならノーカウントよ」

2本目もそのままの勢いでペろりと食べてしまう。味的には全然まだ食べられる段階だが、多少喉が乾く。鞆を覗くが、生憎買っていた紅茶のボトルは空だった。

「蓮子、何か飲み物持っていない?」

「んー、私も切らしてて…あ、これなら」

そう言って差し出したのは、先程買っていたゼリー菓子。両手に2本持ったそれを、私はぱつと見て受け取って、飲み出した。

「あつ…そっちは…」

「ん?んー…」

味は少し薄いイチゴの味だ。冷たいゼリーが喉を通る感覚が気持ちがいい。ただ、1つ疑問に思った事。

……私はこのゼリーの封を切ってはいない。

蓮子を買ったのは2本、飲んでいたのは1本。つまり、私が受け取ったものが封の切られているものという事は。

「それ、私の……」

「……」

そういう、事である。私は慌てて蓮子にゼリーを突き返す。しかし蓮子も中々それを受け取ろうとしない。2人で慌ててゼリーを押し付け合うようになってしまう。

「メ、メリーがさつき飲んだんだから飲んじやってよ！」

「元々は蓮子のものでしよう！」

「いや、でも……！」

「いいから!!」

そう言っただけ押し付けて、蓮子は私を置いてもと来た道を走っていつてしまった。残されたのは半分ほど残ったゼリーを手にあたらずむ私。

「これ……残して捨てるのもあれ、よね？」

半ば自問自答の様な言葉を反芻して、残りのゼリーをぱくりと啜える。

錯覚か、さつきよりも甘く感じるような気がしてならなかった。

眼前に立つは

「ふう…」

大学からやや狭い我が家に帰宅し、荷物をそこらに放ってベッドに倒れ込む。別に何かに疲れた訳ではないが、自由な時間に目の前にベッドがあれば飛び込むだろう、誰でも。

時刻は昼を少し過ぎた程度。午前に講義が終わった私は蓮子の制止を振り切り、昼食を早めに食べて帰ってきたと言うわけだ。

「せっかく早いし、何か本でも…」

何か手頃な電子書籍は無いかと端末で検索をかけるが、どれも読んだことのあるものか興味を惹かれないものばかり。本棚の本は読み尽くしてしまっただけ、これは帰ってくる前に本屋に寄ってくるべきだったか。ここしばらく寄っていなかったので何か新作でも出ているかもしれない。

「…ま、今度でいっつか」

1度部屋に腰を下ろしてしまえば動くのは億劫というものだ。また明日、蓮子と一緒に行けばいい。

さて、そうなると本格的にやる事に困る。蓮子はもうすぐ講義だから話せない、本も読むものがない。となると――

「……たまにはいいわよね、うん」

ささつと寝巻きに着替えて、ベッドの上に寝転がる。普段は昼寝など出来る身では無いし、夜の寝つきなんかも多少気にはなるのだがまあ、他にやる事も無ければ仕方ない。

時刻は13時目前といったところ。これならば夕方前には起きられるだろう。掛け布団も無しに、瞼を閉じる。

程なくして。静寂に手を引かれるようにして、私の意識は落ちていった。



「……？」

風が吹きつける音がした。冷えた風が私の身体に染み渡り、驚きながらも目を開ける。窓は閉めた筈だし、今日は天気も穏やかだったけれど、私の目に映るのは自分の部屋などでは無く。

「………」

けれど、特段驚きはしなかった。何度も訪れた影響か、或いは此処が夢なのだと分かっているからか。

私の前に広がるのは、鬱蒼と茂る植物群。無数に生えるそれは、どうやら竹のようだ。

そんな果てのない竹林の前に、私は一人佇んでいた。

「また、変な夢を……」

浅くため息をつく。思えば久しぶりにこんな夢を見た気がする。となればこの先には、また何か人ならざるモノでも潜んでいるのか。

「まあ、進めば分かるわよね」

引き返すという考えは、微塵も浮かばなかった。どうせ夢なのだ、

引き返した所で何かあるかなぞ分からない。ならば、いかにも何かがある場所に歩く方が建設的かと思うのだ。勿論、夢でなければこんな事はしないのだけれど。

ポケットから探り出した端末の淡い光を手に、私は竹林へと足を踏み出したのだった。

——それから、暫し歩いて。

「……ここ、どの辺りかしら」

見渡す限りに竹、竹、竹。今自分が歩いてきた道でさえ竹の中に沈んでしまっている。

有り体に言えば、迷った。

端末の充電も残りが少なくなってきた。やむなく電源を切り、辺りは一層暗くなる。

幸い、全く光が差し込まない訳ではない。だが、道らしい道の無いこの場所でこれ以上迂闊に歩くのは、いくら夢とはいえ危険かもしれない。普段通りに戻った警戒心がそう警鐘を鳴らす。

とりあえず、元きた道を引き返そうか。そう、足を踏み出して。

がさりと、草を踏みしめる音がした。

私ではない。もっと遠く、ちょうど私の背後から。

振り返りながら、後ずさる。どんどん音が近くなっていく。やがて、竹の間を縫うように現れたのは。

「……誰？初めて見る顔。里の人？」

暗がりに溶けるような、黒いマント。裏地に謎の模様めいた何かを刻まれたその下に、何故か何処かの制服を着込んだ少女だった。

「あ、えっと、私は……」

「あつ、もしかして迷子？それとも……私みたいに、外からの人？」

その言葉に、小さく息をのむ。だが私がそれを聞く前に、少女はついと私の前に歩み出た。

「まあ、いいや。迷子は迷子みたいだし、私と一緒に行く？丁度此処から出る所なの」

「ええ……あの、貴女は」

ぐいぐいくる少女に戸惑いつつも口を開く。彼女は何者なのか、夢なのではないのか。少女は慌てた様子も無く、帽子のつばを弄りながら、答えた。

「私？私は宇佐見董子。不思議な貴女の名前は？」



「……んあー」

やる気のない声を出しながら机に伏せる。メリーは講義が変わってこないし、ネットの掲示板にも楽しい情報はないので完全に虚無

だ。本当ならメリーと話したいのだが、教授に招かれた人とやらがどんな人かも分からないのでリスクが高い。常に単位がギリギリの身としては問題ごとを起こしたくはないのだ。

「教授が講義をサボりたかっただけじゃないわよねえ…」

「あら、教え子にそんな事を言われるなんて心外だわ」

「んー…教え子…?」

伏せた顔をずりりと起こすと、そこには腕を組む岡崎教授の姿があった。何故か私の隣の席に腰を下ろしている。

「お、岡崎教授!? いつから…」

「貴女が机に伏せた直後ね。もう講義が始まるし、切り替えないと単位落とすわよ?」

「じゃあ教授も早く準備して下さいよ…」

「私は良いのよ。今日の私の場所はココだから、ね」

そう言つて、椅子に深く腰を下ろす教授。同時に、端末の時計が13時を示した。

講義が始まる時間だ。それを告げる電子音が講義室に響き、同時に誰かが部屋に入ってくる。

「
強烈な、既視感の様なものを、瞬時に感じた。その人が何か珍しい格好をしている訳でも、ない筈なのに。」

教授の殆どが着用する長い白衣に身を包む、華奢な人物。俯き加減のため顔は見えない。いや、俯いて居なくても、顔を見る事は叶わなかっただろう。

何故か、その人は室内だというのに黒い帽子を深く被っていたから

「……」

小さく、口を開く。何か、言葉を選んでいるような様子を感じる。と、俯いていた顔が、すつとこちらを見据えた。

「……暫くの間、岡崎夢美教授の代理として講義を担当します」

よく通る、凜とした声。けれど何故だかその声はひどく、疲れているように、私には感じられて。

「——宇佐見董子です。よろしく」

そう言って、彼女は帽子を…私と全く同じ帽子のつばを、弄っていた。

case. 2 幻想を語るモノ

董子という少女

「へー、ハーンさんも京都に住んでるんだ！私も私も！」

「え、ええ……」

相変わらず光の射さない竹林。その中を、董子と名乗った少女の後を追って歩いて行く。念のために、少し距離をおいたままで。

彼女と話した限りでは、彼女もオカルトに興味があり調べていること、そのうちにこの世界の事を知った事等々を聞くことが出来た。それにしてもオカルト好きは妙なことに巻き込まれるのが常らしい。私は好きというほど好きでもないのだが。

「それで、家で寝たはずなのに起きたらここに、と……うん、それも今の私とおんなじ」

「貴女も……？」

「董子で良いって。元々は違っただけだね、今は寝ている間しか此処にはいられない。だからつきり夢を見ているだけなのかもって思ってたんだけど」

前方に、微かに光が見える。どうやら竹林の出口も近いようだ。その中を、董子……ちゃんは笑いながら歩いて行く。

「まさか他にも外から来た人が居るなんて思ってもなかった！しかも来る方法も全く同じだなんて、偶然とは思えないでしょ？」

「そうね……。ねえ、貴女はいつからこの……此処に来ているの？」

「うーん、細かくは覚えてないけど……まだ半年も経ってないかな？眠って来るのはホントに最近」

眠ってと言う事は、他にも来る事ができると言うことか？だがそうなるとこの場所がどう言った所なのかがますます分からなくなってくる。それを尋ねようとした所で、唐突に彼女の足が止まった。

気がつけば、既にそこは竹林の外。日の光を浴びるのがひどく久し

ぶりな気がして、思わず目を細めた。

「うーん、最近妹紅さんとばっかり会ってるから竹林の外も久々だわ。あ、妹紅さんとは会った？」

「いえ、董子ちゃん以外とは誰も」

「ま、会ってたらもうここまで送ってもらってる筈よね。また今度会った時に紹介してあげる！今日はちよつと時間切れみたい」

「え……？」

「メリーさんの顔。すっごい眠そうな顔してるもん」

思わず目を擦る。だが欠伸が漏れ出て、確かに眠気はありそう。すると董子ちゃんは懐からメモの様なものを出し、何やら書き始めた。

「えーつと、うんこれで良し。はい、メリーさん」

「これは…」

「私のケータイの番号。私ももう少ししたら起きるから、起きて少ししたら電話して。もつと色々聞きたいし！」

「でも、此処で貰っても…」

「大丈夫よ、起きたらちゃんと持ち帰れるから。なんならそこら辺の物なんだって持っていけるわ」

確かに以前も、何かを貰って目を覚ましたらそれが残っていた。彼女と出会って、ますます疑問に思う事が増えた。だがそれをあれこれ考えている内に、どんどん瞼が落ちていく。だが、せめて他にも何か聞いておかねば。

「ねえ、董子ちゃん。貴女は、此処がどんな場所だか知ってるの？夢じゃないなら、一体…」

「此処が一体何処なのかは、私も知らないわ。でも、ここが普通じゃない場所だっていうのは私にも、つていうか誰にでも分かる。だから私はこの世界が何なのか、調べて回ってるの」

「調べて…」

「そう。いずれこの世界の仕組みを解き明かす為にね。だって私は――」

その先を、聞くことが出来なかった。急速に眠気が広がり、意識を侵食する。

そのまま、私の意識は霧散していった。

▼▼▼
「う……」

ベッドに横たえた身体を起こす。竹林中を歩いたからか、あまり目覚めが良いとは言えなかった。

「結局…夢じゃないの……?」

彼女と出会って、話して。謎はどんどん深まっていく。或いは、彼女すらも私が頭の中で作り上げた幻に過ぎないのか。そして、彼女の名前は――

「宇佐見董子…宇佐見……」

もしかしたら、蓮子の身内か何かだろうか。字は聞いていないが、宇佐見という名字はこの辺りでは蓮子しか私は知らない。

そういえば、彼女から貰ったメモがあった。部屋を見渡すと、机の上に確かに置いた覚えのない紙切れがある。

紙には、宇佐見董子の文字。それから端末の番号とおぼしき数字が走り書きで書かれていた。名字は、蓮子と同じ文字。

電話をかけてみるべきか。それとも、先に蓮子に聞いてみるべきだろうか。時計を見ると講義の時間はとつくに過ぎていて、窓の外には夕焼けが広がっていた。

「……」

だが、蓮子が何も知らない可能性ももちろん、ある。加えて私の手元には、相手に直接聞ける手段まである。

「…あんまり、頼りすぎるのも良くないわよね」

ベッドに腰掛け、端末に番号を入れていく。私と同じ方法であの場所に居たのなら、もしかしたらまだ眠っているかもしれない。だが、未知への興味が、私の背中を押していく。

私はそつと、端末の呼び出しボタンを押した。

夢の少女、現の女

「うー、寒い……！」

大学の講義を終えて、夕飯用に材料を買っている間にすっかり時間が経ってしまい。

私は夕焼けを背に浴びながら帰路を歩いていた。

「なーんか、不思議な人だったなあ」

今日の講義で岡崎教授の代理として現れた宇佐見董子という女性。私と同じ苗字なのも気にはなったが、驚いたのは講義の分かりやすさだ。今まで大して理解の進まなかった講義が、彼女が話すとするりと頭に入ってくるような感覚になるのだ。他の生徒はいつも通り頭を抱えるのが多数だったが。

「しかも暫くはあの人が講義……そっちの方が分かりやすいかも」

大学でこんな事を言おうものなら聞きつけた教授に鬼のような課題を投げつけられてしまう為、外でしか言えないのがなんとももどかしい気もするが、私の思っている事も事実であって。

とりあえず、さっさと出された分の課題をこなして明日渡しに行くついでに話でも聞きにいこうか。

と、そこまで考えていた所で眼前には私の部屋。けれどそこには、人影があつて。

「……メリー？……どうしたの、連絡もなしに」

家の前にもたれるのは、馴染みの姿。メリーは少し言葉を選ぶような素振りの後、困り顔で口を開き。

「えっと、蓮子……急にこんな事聞くのもあれなんだけど。……宇佐見董

子、って女の子の事、知ってる？」

そう、彼女の知るはずのない名前を、口にした。



「へえ…そんな夢を」

我が家の台所で夕飯の支度をしながら、私はメリーが見たという夢の話聞いていた。

曰く、夢の中で再び見たことのない場所にいた事。そこで宇佐見董子と名乗る少女と出会ったというのだ。

「でも私が見たのは私達より少し下くらいだったわ。確か高校生だった…」

「うーん…でも私の会ったあの人も特徴を聞く限りは同じなのよね、帽子とか眼鏡とか…あっ、メリー醤油とって」

鍋に適当に切った具材を放り込み、醤油やらで味をつけていく。元々大したものを作るつもりでは無かったが、メリーが来るのは予想していなかった為急遽鍋物に変更したのだ。

「後は煮込めばよし、と…テーブルの上片付けといてー」

「もう準備してあるわよ、もちろんコレもね」

そう言って掲げたのは冷蔵庫にしまつてあつた安物のワイン。栓を開けたら1人で飲み切るには時間がかかるし、2人で飲めば丁度いいだろう。

テーブルの上に設置した卓上コンロの上に鍋をセットする。器具には少しだけお金をかけている為、すぐに火は通る筈だ。その間、先にグラスにワインを注いでおく。

「とりあえず、あの人の事は食べてから考えましょ。折角ワインまで

空けたんだし」

「そうね、どうせなら今日は泊まっていくなのもアリかもね」

フタを取ると、大量の湯気が部屋に放たれた。同時に良い香りが鼻をくすぐる。適当に椀に取り分けて、さっそく口へと運んだ。

「んー…ちよつと味薄い？かな」

「あんまり濃すぎてもだし、このくらいで良いんじゃない？ワインもあるんだし」

そう話すメリーのグラスは空っぽで、早くも2杯目を飲み出していた。私もならってワインで流しこむ。殆どジュースのような味で、いくら飲んでも酔いが回る気配の無さそうな味だった。

「メリーも事前に言ってくれたらもう少しくらいちゃんとしたもの作ったのに」

「仕方ないじゃない、急だったんだから。それに前振りなく訪ねてきても、困る事なんてないでしょう？蓮子のことだから」

「そりやそうだけどさ…」

椀で泳ぐ野菜を纏めてかきこむ。適当に切って煮込むだけでもちゃんとした味になるから、ついつい鍋が多くなりがちなのだ。もつともそんな考えの人は一定数いるのか、野菜や豚コマなんかはいつも安いからありがたい事だ。

大きな鍋でも無い上に2人いるとなれば、その分鍋の空くスピードも高く。瞬く間に鍋の中はスープだけになり、私達は食後のワインをちびちびと飲むことになっていた。

「…それでね、蓮子。私、蓮子ちゃんから端末の番号を貰ったの」

「急に戻すわね、話題を…。それで？」

「繋がらなかったわ、番号は使われていないってさ。嘘の番号を渡されたって可能性もゼロじゃあないけど…」

「そんな事する理由もない、と」

電源が入っていない可能性も、ひと昔前まではあった。だが現在は端末側で通知は全て管理できる為、電源を落とす人は残っているまい。

「彼女もオカルトを調べたりしてると言っていたし、蓮子の方にそういう人脈とか無いの？」

「別に私は顔が広いわけじゃ無いのよ。大体今の人脈なんてネット越しで片付くんだから、私の知り合いに本当にその子がいるかなんて分からないわよ」

「じゃあ、手がかりは…」

「ウチの教授だけ、ね。今のところは」

名前が合っているだけの他人の可能性が正直に言えば高い。夢の中でメリーの会った少女と、今日私が見た彼女の姿は合致しないためだ。夢の中なら全て自由と言われれば、それまでだが。

「それなら、とにかく本人に聞くのが吉ね。メリー、明日空いてる？」

「午後は何もないけど…まさか蓮子」

「目の前に手がかりがあるなら、まずはそれから行かないと！そうと決まれば…」

「ん？」

「今日はもう休むわよ！」

「ええ…？私今日泊まりなの？」

「別に嫌とは聞いてないわよ」

「まあ…そうだけど」

メリーに構わず布団を引っ張り出して机と載っていたものを撤去する。気づけば外はすっかり暗くなっている。意外と長く話し込んでいたらしい。

「じゃ、私は寝る準備しておくから。メリーは先シャワー浴びてきてー」

「はい。…そういえば私、着替え…」

「私のを適当に貸すわよ。じゃ、ごゆっくり」

浴室に向かうメリーを見届けて、敷いたばかりの布団に寝転がり、目を閉じる。脳裏に見るのは、私の出会った彼女：董子さんの事。

ただ1度講義を受けただけだから何とも言えないが、彼女はどこか疲れたような様子だった。仕草も声も、何もかもが。

メリーの出会った彼女は、私達のようにオカルトを調べているのだという。調べるのは興味や好奇心か、その類の感情があるからで。

けれど、私は。

彼女の瞳に、そのような感情の片鱗すらも、見出す事が出来なかったのだ――

Who are you…?

「……ん」

窓の外から、雨の音がした。突っ伏していた机から上体を起こすと、霧雨が降っているようだ。

「雨か…嫌だな」

湿度の上昇もそうだが、何より傘をさして歩くのは億劫だった。科学世紀といえど、未だにハンドフリーに出来る傘は開発されていない。

もつとも最近は何も傘をさしたことなど無いし、今日だって使うかは分からない。自分に与えられた研究室に籠りっぱなしの為だ。

なんと何もないに、身体を伸ばしてみる。籠もって硬くなった身体が悲鳴を上げているのが分かる。

「そろそろ、また外に出ようかな」

机の上には各所で作った資料が雑に散らばっている。中には岡崎教授から渡された資料も混ざっていた。確か、魔法がどうたらと言っていたか。なんであれ、今の私が興味を持たないであろう事は容易に想像できた。

椅子を立ち、インスタントのコーヒーを淹れる。今日は任されている講義はない為1日籠もって終わるだろうと、そう思った直後だった。

部屋のドアを叩く、無機質な音が響いた。

ここに用のあるのは岡崎教授位のもんだろうと踏んでいたが、次いで聞こえてきた声は学生のもだった。

「………？」

手早く机の資料を片付け、岡崎教授の資料だけを机に放り出す。見られて困る訳でもないが、何か余計な事を言われて時間を取られるの

も手間だった。

何の要件かは知らないが、さっさと終わらせてしまおう事にしよう。そうして私は、部屋のドアに手をかけた。



「寒い…なんで急にこんな冷え込むのよ…」

「最近の気候が安定しないからねー、薄着はあんまりお勧めしないわよ」

「そういうのは出る前に言ってくれないかしら…」

愚痴るメリーを宥めながら、私達は大学に足を向けていた。

目的地は普段講義を受けるキャンパスでは無く、そのさらに奥。主に教授達の研究室が並ぶ棟だ。足早に駆け込み、さしていた傘を閉じる。

「雨なら明日でも良かったんじゃない？今日休みなんだし…」

「目の前にある不思議は霧雨なんかじゃ止まんないのよ！さっつと、教授の研究室は、と」

入り口に貼られた電光掲示板で位置を確認する。董子さんの研究室は1階の1番奥にひっそりと佇んでいるらしい。目を向ければ、日の当たらない角に扉を見つけた。

「おつ、あそこね。よしメリー、行くわよ！」

「分かったから傘は置いていってよ？蓮子ったら振り回しながら走っていきそうで」

ああ、そういうえば持ったままだったか。入り口の傘立てに放り込み、再び奥へ進む。目前に迫った扉には他の研究室には貼られているネームプレートが何故か、貼られていなかった。

「すみませーん」

とりあえず、扉をノック。中から物音が聞こえる為、どうやら在室の様だ。

数伯あつて扉が開かれ。そこには寝起きのように髪を乱した董子さんが面食らつたような顔で立っていた。

「……貴女は、確か宇佐見さん？横の彼女は……」

「えと、友達です。ちよつと聞きたい事がありました」

そのまま招かれて部屋に足を踏み入れる。整然とした部屋は何処か殺風景にも見えて、大学教授の研究室とは思えないほどだ。

その隅に置かれたソファにメリーと並んで座る。対面で座る董子さんは講義の時の様な気怠げな様子でこちらを見ている。

「それで、聞きたい事つて？友達と来るつてことは講義の事じゃないんでしよう？」

「はい。えーつと……」

何をどう聞いたものか。私とメリーは夢の事を知っているが、確証のない今彼女にそれを話せば変人扱いされて終わるだろうか。ともあれ私は正面からぶつけるしか手はないのだ。

「董子さんつて都市伝説とか……オカルトとかつて、信じますか？」

「……え？」

聞こえた声は董子さんのものか、メリーのものか。恐らく両方だろう。董子さんはまたも面食らつたような顔をしており、メリーは呆れたような、半ば諦めのような顔で私を見ていた。

「隣の彼女が昨日、夢で”宇佐見董子”を名乗る女の子と会つたと言うんです。詳しくは彼女から」

「えっ……。まあいいわ。昨日の事なんですけど……」

唐突に振られたからかメリーが一瞬こちらを睨んだような気がしたが、人前だからかすぐに切り替えて説明を始めた。

夢の中で未知の世界に居たこと。そこで宇佐見董子という少女に出会ったこと。彼女から渡された端末番号のメモガシャ実際に手元にあること。その全てを、董子さんは目を閉じて聞いていた。そして、全て聞いた後に、ひと言。

「ただの夢よ、それは」

きつぱりと、そう断言した。

「夢…ですか？」

「そう、夢。私と貴女は初対面だし、そのメモだつて誰か大学内の知り合いが誰かが悪戯で忍び込ませたとも限らない。それに…」

1度、董子さんは言葉を濁した。僅かに目を泳がせ、しかし直ぐにこちらを見直した。

「科学の発達したこの時代に、オカルトなんて存在し得る筈はないわ。きつとね」

「……」

メリーは、納得していない様だった。私も同じ気持ちだ。

だが、これ以上何かを聞くことも出来まい。やはり考えすぎだったのだ。彼女から何かを知っているような素振りは見られない。それに確かに、科学世紀でオカルトなど、本来であれば在る筈がない。少なくとも、私達以外から見れば。

「…分かりました。じゃあ、私達はこれで——」

「あ、宇佐見さんは少し残って。講義の件で話があるの」

「…?はい。ごめんメリー、先帰ってて」

「先も何も私達別に同居はしてないでしょ…。失礼しました」

小さくため息を漏らした後、丁寧に辞儀をして部屋から立ち去るメリー。そういう所は相変わらず几帳面なのだ。

扉が完全に閉まるのを待ってから、董子さんは口を開いた。

「彼女は…随分“あちら”の近くにいますみたいね」

「え……？」

「私もあつたの。夢の中で彼女の言う世界に……幻想郷に迷い込む事が」

「……！」

呆気にとられる私をよそに、董子さんは備え付けられた机の引き出しから、何か分厚い本を出した。どきりと私の前に置かれたそれは、言葉で言い表せない様な存在感を放っていて。

「夢の中からでも、物を持ち帰る事が出来る……その書物が、私が持ち帰った最大の物よ」

とても古い書物だろうか、表紙は半ば掠れていて何が描かれているかの判別はつかない。けれどタイトルの書かれた部分だけは、比較的状态を保っていた。

「幻想郷……縁起……」

「一種の歴史書の様な物よ。私が見たものや、恐らく彼女が出会った者達も、全てここには書かれている」

「なんでそんなもの……董子さんは、何者なんですか？」

私の問いに、董子さんは軽く目を伏せた。すぐに開かれた目はどう話すかという迷いの様な、苦々しい色をしていたように、私には見えなかった。

「私はね……有り体に言うなら、超能力者なの。この世界で、多分ただ一人のね」

告げる彼女は、これまでで一番気怠げな顔をしていた。

まるで地獄のような

超能力と聞いて、どんなものを思い浮かべるだろうか。

テレポーテーションだろうか、もしくは宙に浮かんだり、もつと昔に遡ればスプーン曲げも含まれるかもしれない。

そして、目の前の彼女は——宇佐見董子は、その全てを肯定してみせた。

「貴女の言うそれらが、一般に超能力と言われているであろうもの。同時に、私が出来た事でもある。ま、スプーン曲げは原理が分かれば誰でも出来るインチキなんて話も聞いたけど」

「でも他の超能力だって、同じようにインチキだって」

「私以外にとっては、ね。少なくとも私は、他にテレポートしたりする人間を見た事は無いわ。近い事をする存在はいてもね」

そう話す彼女の瞳は、今まで見た中で一番光を取り戻している様に見える。何処か、噂話を探しに行く私達にも似たような調子で、彼女は饒舌に話していく。

「昔はこんな力があつたもんだから、まあ好きにやってたわ。そのうちに私は幻想郷と言う場所の存在を知り……人の目には触れないそれを、暴き出したくなった。私に出来ない事なんて、無いと思つていたらから」

そこまで話して、気の抜けたようにソファに座りなおす。深いため息と共に、その手は机に置かれた書物、『幻想郷縁起』をそつと撫でた。

「でも、結果は惨敗。私は異物として肉体を幻想郷から拒絶されてしまった。元々長く居た訳でもないけど、実質的な追放ね。けれど、私にはまだ幻想郷に入る手段があつた」

「それが、メリーと同じ…」

「そう、夢としての侵入。眠っている間だけは、私の意識はあの世界にいられた。この本もそのいつかの機会に持ってきたもの、やっぱり好き放題やってたからね、あつちでも。それなりに、長い時間過ごしたし」

やはり、此処を訪ねた私達の賭けは間違いでは無かったのだ。その辺の噂話など比べ物にならない位の信憑性を持つ話が、私の目の前にあるのだから。メリーが迷い込んだ空間と、董子さんの過ごした幻想郷。2人の情報を重ねれば、或いは幻想郷を暴き出す事さえも、出来るのではないか。

そんな期待に胸を膨らませる私と対照的に、董子さんは険しい顔でこちらを見ていた。

「ねえ、宇佐見さん。コレは、ハーンさんと同じ幻想郷を見た私からのアドバイスだと、思ってもらえれば良いのだけど」

「…?」

「貴女達は…幻想郷の事は、全て忘れるべきだわ。特に、ハーンさんの方は」

「え…!?!」

頭を殴られた様な衝撃。呆気にとられる私に、彼女は話し続ける。

「私はある程度長くあの場所にいたけれど、あそこは危険よ。馴染めば馴染むだけ、現実には戻れなくなる。ハーンさんが何度も訪れているというなら、もう馴染み始めているのかもしれない」

「そんな事、言われても…:…それに、メリーに行くなって言っても、私には」

私には、メリーを直接止める手段が無い。言葉で言う事はできて、夢の中にまでは干渉できない。夢見ることは、止められない。

「……忘れる事よ。何故ハーンさんが幻想郷を見たのかは分からない。いえ、私でさえ夢で幻想郷に入り込めた理由は分からない。けれどそれがどんな夢でも、忘れてしまえばそれで終わりよ」

そう言つて、彼女は机の上の幻想郷縁起を引き出しにしまい込んだ。私にはそれが、未知の世界を閉ざす様に、どうしても見えてしまつて。

「…董子さん」

「何？」

「董子さんは…何故そんなに引き止めるんですか？私がメリーから聞いた幻想郷のイメージからは、全然想像がつきません」

食い下がる私に、董子さんは少しだけ困つたような顔を見せた。そして、言葉を選ぶような間があつて。

「初めの頃は、私も楽しかった。でもね、後になつてから気付くパターンだつて、色々あるのよ。今ここに居る私から言わせれば、あの場所はまるで——」

「——地獄だつたわ。迷い込んだものを閉じ込めて、縛り付ける地獄よ」

地獄。

その言葉に、言いようのない悪寒を感じて。私は挨拶だけ手早く済ませ、逃げるように部屋を後にした。

「……」

そうして、どれくらい経っただろうか。目的も無く歩いていたら、いつの間にか空には月が昇っていた。

いつの間にか、河川敷まで歩いてきていたようだ。適当な場所に寝転がり、空を見上げる。

「忘れるべき…」

耳に残る言葉。董子さんはメリーの見た世界を、地獄のようだと言った。けれど私には、どうしてもそんな風には思えない。夢の事を話すメリーは、不思議がつていながらも、なんだか楽しそうな顔をしていて。

メリーは今、この月を見ているだろうか。それとも、夢の中でまた幻想郷に踏み入り、私とは別の月を見ているだろうか。そんな事、この場の何も知りはない。私の目に映るのは月と星、それに時間と場所だけだ。

そのどれも、私の知りたいたい事ではない。煌々と輝く月を遮るように、私はそつと、目を閉じた。

瞳に映る毒

「……んー?」

時刻は昼、場所は大学の食堂。蓮子は素っ頓狂な声をあげて首を傾げていた。

「どうしたの、いきなり。また講義忘れて単位落としたの?」

「単位落としたまで行っただことは無いわよ、失礼ねーじゃなくて、この前蓮子さんに出したレポートがボコボコにされて帰ってきてるのよね…」

「ボコボコって…」

見せられた画面は確かに、ボコボコといって構わないような内容だった。全体の7割以上にダメ出しがあつたり、細かいミスを指摘されたりしている。

「蓮子さんそんなしつかり中身見ないタイプだと思つてたのに…」

「…適当に書いたのね」

「ぐぐぐ…それっぽく書いたのに…」

そんな事をぶつぶつと呟きながら画面に向かう蓮子をよそに、私は昼食をぱくついていた。まだ昼休みには余裕があるが、蓮子の様子ではのんびりお昼を食べる暇があるのかどうか。時折こちらを恨めしそうに見つめる目線から容易に察する事はできるのだが。

「メリーも書くのてつだつてよー、どうせ今日はもう暇でしょ?」

「何で暇なら人のレポートを書かなきゃいけないのよ…。それに私蓮子のとつてる講義は専門外だし。私が書いたらきつとすぐバレるわよ」

打つ手なしというように頭を抱える蓮子の頭上から、帽子がずり落ちる。きつと蓮子のレポートも同じように点が貰えないところまで滑落していくことだろう。どうあれ私にはあまり関係のない話だ、と私は食器を返却スペースに返した。

「あれ、メリーもう帰るの?」

「もう今日は暇だからね。久しぶりに本屋も寄りたしいし」

「あつじやあ私も」

無言で蓮子の抱えるレポートを指さす。いくら楽な講義とはいえ講義もレポートも投げ出すのは得策とはいえない。岡崎教授なら何でもなるかもしれないが、どうやら蓮子さんはそこまで甘くもないようだし。

結局最後まで恨めしそうな蓮子の視線を背中に受けながら、私は食堂を後にした。

「これでよし、と」

寄り道ばかりしていたら、いつの間にか日が沈みかけていた。寄り道と言っても殆どが本屋で足止めを食らっただけの事だが。夕飯は家にあるもので作れるし、気になっていた本も買えたし後は帰るだけ——というところで、私の視界を何かが掠めた。気になって目を向けると道の先、曲がり角に黒い尻尾のようなものが揺れていた。

「猫かしら…珍しいわね、今時」

数年前から野良動物は保護や駆除で殆ど数を減らし、実物なんて山登りでもして熊に会うくらいしか出来ないと思っていたが。生き抜く生命力はずっと頑強らしい。物珍しさに、私は後を追う事にした。曲がり角を曲がり、猫の姿を探す。するともう次の曲がり角に入っただようで、再び尻尾が揺れている。少しずつ足を早めていっても、何か追いつくどころか尻尾以外を見ることがすら出来ない。そうしてどんどん深く追ってしまう。これでは、まるで——

「…行き止まり…」

何度目かの曲がり角を曲がると、古びた社が鎮座する場所に出た。私の目の前には、それを守るように朽ちかけた鳥居が構えている。だが見渡しても、肝心の猫は何処にも見当たらない。社の屋根でも伝つて逃げてしまったのだろうか。とんだ無駄骨だ。仕方なく、元きた道を帰ろうと踵を返す。

そこには、一面の黒が広がっていた。

私を通ってきた狭い道に押し込められるように、黒いナニカが満ちている。中から、2つの眼がぎよろりと開いた。

いや、2つなんてものではない。黒の至る所から、一斉に覚醒したように無数の眼が開かれていく。

「うっ……！」

その異様さに押されて、ゆっくりと後ずさる。視界に入れているだけでも、悪寒が止まらない。だが、道は目の前のみ。あの無数の眼の先だけだ。

呼吸も荒く、私の足は鳥居を超えて後退する。このまま社の側まで行くべきか？だがこのままでは間違いなく逃げられない。周りには高い塀がある。それを私が乗り越えられるはずもない。

そんな事を考えながら後ろに伸ばした足は、だが地面を踏みしめる事はなかった。

がくりと体勢が崩れる。そのまま重力に従い、ゆっくりと後ろに倒れ込み——私を襲ったのは、浮遊感。

無数の眼も鳥居も、急速に遠ざかっていく。周りに広がるのは、純粹な黒。

そのまま闇の中へと、私の体は落下していった——

まるで楽園のような

「……っ！」

視界に光が差し込み、とっさによろける。足元にはしつかりと地面を踏む感覚がある。黒い十二力も背後にあつた社も何処にも見当たらない。あるのは以前に見た気がする鬱蒼とした竹林だけ。

「……は……この前に夢で来た」

宇佐見董子を名乗る少女と出会い案内してもらつた竹林、その出口だ。ならば、私は今夢を見ているのか？

だが、私はもちろん眠ってなど居ない。足を滑らせた時に頭でも打つたのかもしれないが、それにしても何も覚えはない。あるのは足を滑らせた時の浮遊感と、自分がどこかに落ちていった様な感覚のみ。

「とにかく、なんとかしないと……」

もし夢ならばその内覚めるだろうが、それまで待っているほど暇ではないのだ。それに、もしかしたら董子ちゃんにまた会えるとも限らない。夢でその表現はどうとも思うが、他に言葉を知らないので仕方なし。

出口から伸びている道を頼りに歩いていく。何処に繋がっているかは分からないが、少なくとも道があるならその先に誰かしらいるだろう。

いくらか進んで行くと、不意に横から音がした。茂みを走るような音が、段々とこちらに近づいてきて——次の瞬間、木々の間から人影が飛び出して来た。とっさに避けようとして尻もちをついてしま

「わわっと、ごめんなさ……あっ！」

「え……っ？あっ」

目の前でこちらを見下ろしているのは、他でもない董子ちゃんだった。



私達は少し進んだ先の開けた場所で座り、私は以前にあった出来事を彼女に話した。即ち、宇佐見董子という女性が彼女より明らかに年上として存在していること、教えてもらった番号は繋がらないことなどだ。

「……ん？つまり、ハーンさんの大学には私の名前を騙った誰かがいる…？それに番号は変えてないんですけど…。ちよつと今試しに何か送ってもらってもいいですか？」

彼女に従い、アドレスにメールを送る。するとすぐに手に持つ端末から着信音が響いた。

「うん、ちゃんと届きますね。でもなんで外じゃ使えないんだろう…？変えたりなんてしてないのに」

「電波が届かないって感じでもなかったし…やっぱり一回ちゃんと会った方が良いのかしら？」

「そうしましょう！ハーンさんって明日ヒマですか？」

「明日は…うん、午後からなら大丈夫」

私の言葉に頷くと、董子ちゃんは何かを端末に打ち込み始めた。程なくして、私の端末に着信音。やはりここではしつかりと届く彼女からのメールには、一箇所にはバツ印の描かれた地図が同封されていた。

「そこ、ウチの学校のすぐ前なんです。明日の3時に、そこで待ち合わせましょう」

地図を私の端末に保存する。地図上に表示されている校名は『東深見高校』。起きたときにこの名前で検索をかければ良いだろう。

その後、しばしの沈黙。隣には、足をぱたぱたとして何やら楽しげな董子ちゃんの姿があった。その姿は、この夢をとても楽しんでいる

感じがして。だから、ふと聞きたくなつたのだ。

「ねえ、董子ちゃん」

「ん、何です?」

「私、董子さんに…この夢の事は忘れた方がいって言われたの。私
が今見ているこれは、ただの夢なんだって」

「……」

「でも、貴女は…董子ちゃんは、すごくこの夢を楽しんでいる気がする
の。よく分からない場所に放り出されるのは、差はあっても誰もが不
安に思うはずなのに、貴女からは全くそれを感じない気がするの」

私の言葉に、董子ちゃんは僅かに悩むような仕草を見せる。だが、
そんなことは決まっていると言わんばかりに顔を上げ、帽子のつばを
弾いて見せた。

「私にとって、この夢はただの夢なんかじゃないんです。私にとって
ここは——本当に、楽園のような場所なの」

「楽園……」

「そう。私が1番、私でいられる場所。きつとその人は、ここに来たこ
とが無いんですよ。だから、私達が羨ましくてそんなこと言うん
です」

「そう…かしら」

彼女が本心からそう言っているのは分かる。だが同時に、どこか狂
信めいた、危うさのようなものも感じられるような——

「…ふあ」

と、間抜けな声が私の思考を遮った。声の主を探すまでもなく、す
ぐ隣から響いた声は間違いなく董子ちゃんのものだ。

「あー、ごめんなさい今日はここまでみたい…。最近目が覚めるのが
早いですよね…」

「寝過ぎは身体に毒だから、それよりは良いと思うわよっ!」

「私としてはずっと寝てても良いんですけど…ともかくハーンさん、

明日ちゃんと来てくださいいね！」

それだけ言い残して、董子ちゃんは背後の木にもたれるようにして目を瞑った。程なくして、その身体は霧のように霧散してしまった。「…目が覚めたのかしら……」

おそらく私も同じように夢から覚めるのだろう。だがあいにくまだ私に眠気は来ていない。少し散歩でもすれば自然と眠くなるだろうと、私は歩き始めた。

誰もいない道に、私の足音だけが響く。どこまでも代わり映えしない景色の中、私は董子ちゃんと、現実であった董子さんの言葉を反芻していた。

「董子さんは、ただの夢だと言っていたけど……」

董子ちゃんはそれを、羨ましがっているのだと言った。そんなことを言うのはここに来たことが無いからなのだ。だが、逆に来たことがあるのだとしたら？ここで何か危険な目にあつて、それを忘れようというのなら、筋は通るはずだ。董子ちゃんは、微塵も思っていないようではあつたが。

「彼女にとっては、楽園……」

「——そう、楽園。彼女だけじゃなく、ここに招かれた全てにとつての、楽園と呼べる場所よ」

背後から、声がした。慌てて振り向こうとして……振り向くのを、やめた。正確に言えば、振り向く事ができなかった。それどころか、私の身体は縫い付けられたようにびくともしない。ただ、背筋に強い悪寒を感じる。彼女は、とても危険なのだと身体が警鐘を鳴らしている。

すうと、頭上が暗くなる。辛うじて向けた視線の先には、巨大な日傘のようなものが覆っていて。

「初めまして、私ではないアナタ。束の間の夢は楽しめたかしら？」

背後から聞こえる流麗な声に、私は答えることが出来なかった。

夢の郷

「あら、無反応？冷たいこと」

言葉の全てが、まるで針のように私に突き刺さる感覚がする。口を動かすことも、それどころか身動きすらとることが出来ない。

「…まあ、良いでしょう。それより貴女、覚えているでしょう？さつき
の女の子は、此処を何と言っていたか」

彼女が言っているのは、恐らく董子ちゃんのことだろう。彼女は、
ここをまるで——

「天国、みたいだって…」

背後で頷く気配がした。同時に、頭上の日傘がゆらゆらと揺れる。

「そう、此処は天国。此処に招かれるモノは等しく、此処が終着点となるの。さつきの彼女も、私も。あるいは貴女がこれまでに出会った全てにとって。……けれど、貴女だけは違う」

「今の貴女は幻想郷に相応しくないわ。私と縁で繋がっているだけで、貴女はまだ現実を歩いているのだから」

「縁って……貴女のことなんて、私」

「知らないでしょうね。けれど私は誰よりも『マエリベリー・ハーン』を知っている。それに、そう……貴女のお友達、宇佐見蓮子のことだって、たくさん」

「！」

思いがけない名前に、弾かれたように振り向く。だが、既にそこには誰も居なく、気配も無くなっている。だが、何処からか声だけが響いてきて。

『きつと貴女は、この先何度も幻想郷へ来ることになるでしょう。他の妖達は知らないけれど、私は歓迎致しますわ。願わくば、お友達も連れてきて貰えると助かるわ』

「何を…。貴女は、一体なんなの…？」

絞り出すような私の言葉に、声はくすくすと笑ってみせた。それは

楽しんでいよう、まるで無知な私を嘲るような、そんな笑い声。『それも、いずれ分かること。では、ご機嫌よう。願わくば、貴女が早く幻想郷に馴染んでくれると良いのだけれど』

そう残して、静寂。残された私は、ただ呆然と空を仰ぎ見るのみ。彼女が何なのかは、まるで分からない。それどころか、あちらは一方的に知っているかの様な物言いですらあった。以前董子ちゃんに名乗ったのを聞いてきたならともかく、蓮子の名前を出したことなど無いはずなのに。

……考えるうちに頭が煮詰まってきた。とりあえず移動しようかという所で、横から強風が吹いた。突然で抑える暇もなく、私の帽子がふわりと宙に舞った。

「あつ、待って……」

飛んだ帽子を掴もうと一歩踏み込み、どうにか指先に帽子を引っかける。やれ安心だと置いてきた足を並べて――

すかつ、と地面を踏み外す感覚がした。

恐る恐る足下を見る。やはり私が予想した通り、地面など無くなっ
ていて。そのまま、私の身体は2度目の落下を始めた。

「ッ」

叫び声を上げるようなことはしないが、怖いものは怖い。足元に向けていた視線をせめてと上に向ける。

その先には、こちらに向かつて手でも振るように動く見覚えのある日傘と、その隙間からなびく長い金髪があった。一瞬、その中に見えた瞳と私の瞳がぶつかって――

その瞬間、私の意識は沈んでいった。



「…リー…メリーったら!!」

聞き馴染んだ声が耳元で聞こえる。目を開けると、困り顔の蓮子が私を覗き込んでいて。

「れんこ…?」

「何でウチの玄関にもたれて寝てるのよ…この前鍵は渡しておいたでしょ?」

振り返ると、確かに蓮子の家だ。私は社のような場所に居た筈なのだが…どうも、大学を出てからの記憶が上手く思い出せない。ただ鮮明にあるのは、

「夢…不思議な、夢を見たの」

「不思議な夢、ねえ…とりあえず、家で話しましょ。コーヒーでも淹れるわ」

蓮子に促されて、ひとまず蓮子の家にお邪魔する事にした。

そして、夢の出来事を全て蓮子に話をした。当の蓮子は、コーヒーを飲みながら眉を寄せていた。

「幻想郷…その人は本当にそう言ったの?」

「ええ。それに私や蓮子のことも知ってるって…」

「夢なら現実で知ってる私の名前が出てきてもおかしくは無いけど…董子さんの言ってたことって本当だったのね」

「董子さんが、何か言ってたの?」

「ええ、とびつきり重要なことをね」

ぐいとコーヒーを飲み干して、蓮子が言う。どうでもいいがコーヒーを一气飲み出来る人間は舌が軽く麻痺してるんじゃないかと思う。蓮子だし。

「あの人も、幻想郷に行ったことがあるって。それに、あの人もメリーと同じように持ち帰ってきた物があるのよ。幻想郷にまつわるね」

蓮子さんに夢の話をした時、彼女は忘れろと言った筈だ。ただの夢なんだと。だが同じ経験があるなら、何故あの時ああ言ったのだ？蓮子曰く、彼女は幻想郷を地獄のようだと言ったと言う。そう言わせる何かがあるそこにはあると言うのか。

「…これは、秘封倶楽部始まった以来の大事になりそうね」

「そうは言っても、何だか楽しそうに聞こえるんだけど？」

「勿論よ！こんな興味を惹かれる物、暴かずにいられるもんですか！いいメリー、これから当面の活動は、幻想郷とは何なのかを突き止める。こと！その為に片っ端から調べていくわよ！」

いつにも増して饒舌だ。それだけ面白いのか、或いはここ最近これといった活動をしていなかった反動かも知れない。どうあれ、私も寝るならすつきり目覚めたいのだ。なるべく早く、幻想郷について突き止める必要があるだろう。

気持ちを引き締める為に蓮子の真似をして手付かずだったコーヒーを一気飲みしてみる。

黒烏龍茶だった。

case 3. 背中合わせの視界

休日

「……」

じつと、私は学食の壁の時計を見ていた。本来ならば午後の講義はないのでそのまま帰っても良い。それどころか今日は完全に講義がない為そもそもここにいないこと自体おかしい事態ではある。なのに何故私がここにいるのかと言えば――

「ごめんごめん、待った？」

「待ったも何も、私今日休みなんだけど……？」

悪びれる様子を微塵も感じさせない蓮子は、土鍋のようなものを私のテーブルに置いて席についた。昼食のために呼び出された私だが、今日は珍しく鍋が売っているのか。確かに最近は寒くなってきたし丁度いいかもしれない。

「休みなのは知ってたわよ、でも今日限定で売ってるって言うからついね。メリーったら季節モノとかあんまり気にしないでしょ？」

「人並み程度、ね」

私に比べて蓮子は限定などの文字を見ると大体は買っている。流されやすいというべきか、流行りに乗るのが上手いと見るべきか。ともあれまずは昼食だと、土鍋の蓋を開けると大量の湯気がぶわりと噴き出した。その中にうっすらと見えるシルエツトは、

「…カニ？」

カニの足そのものだ。目を凝らすと何やら少しへたれた様な怪しい足も見えるのだが。

「そう、カニ。その名も『半天然カニ鍋』よ！」

「半なの？」

「そう、半分だけ天然モノ」

「……残りの半分は？」

「カニカマだって」

なんとかもう半分もカニには出来なかったのかと鍋の中でぐつたりしているカニカマを見て思う。そもそも半分とはいえ結構な量はあるし、周りには他の学生達は何とも言えない目でこちらの鍋を見ている。

「私が最初に買ったみたいだね。いつ無くなるか分からないっていうからラッキーだったわ」

「いや、それ多分いい意味じゃ……」

いや、楽しそうな蓮子の夢を壊す様なことは言うまい。たとえ売れてないとしてもこの鍋が美味しければそれで良いではないか。

「じゃあまあささっと取り分けて、と。いただきまーす」

殻を剥いて現れた身にかぶりつく。ほぐれる様な食感とわずかに甘みを感じる。鍋の出汁もよくしみていて、どこことなく薄味ぎみだろうか。隣の空きテーブルからポン酢を拝借してタレにし、再びいただく。さっぱりとしていてこちらも美味しい。

カニカマも最初は何もつけずに。カニよりもぎゅつとした歯応えのある食感とより濃いめの味で、こっちの方がポン酢なんかは合うかもしれない。鍋についてきたおたままで出汁を追加でかけようとして、あることに気付いた。

「……この鍋ってカニとカニカマ以外何かないの？野菜とか」

「無いわよ、完全にカニとカニカマだけ。あ、ポン酢とってー」

「だって……それじゃ飽きるでしょ」

「だからメリーを呼んだのよ。半分ずつ食べればなんのその、よ」

その言葉は半分だけ正しかったといえる。予想よりもボリュームのあった鍋を私達はどうか食べ終えたものの、やはり食べるうちに

来る飽きは払拭しきれず。少なくとも私は暫くカニは遠慮しておきたい。そんな機会もそうそう無いことではあるが。

「…ほら、やっぱり正解だったでしょ？」

少しぐったりした様子で蓮子が言う。何かとパワフルな相棒も胃袋は常人寄りらしい。

「そうね…少し休んでから帰ろうかしら」

「私この後講義なんだけど…真面目に受けられる気がしないわ……」

「貴女は大体真面目に聞いてないでしょう……」

2人してテーブルに突っ伏す。帰りにデザートでも食べようかと思っていたが、これではとても無理そうだ。

「……とりあえず、私は講堂行くわ……。もうすぐ始まつちやうし」

「はいはい…ちゃんと受けなさいよね」

「分かってるわよ。あ、そうだメリー」

「うん……？」

「今すぐじゃなくても良いんだけどね……。今まで貴女が夢で見たもの、何を、誰を見たのかっていうのを、なるべく多く思い出しておいて欲しいの。今日これも言いたかったのよ」

「それは良いけど……」

「なら、頼んだわよ。じゃー！」

理由を聞く前に、蓮子は駆け足で行ってしまった。それを追う気力は今の私にはない。

私は結局そのまましばらく、食堂のテーブルに突っ伏すハメになったのだった。

幻想への鍵を

もうすぐ、講義の始まる時間だ。私は手持ち無沙汰に端末をいじくっている。座る席はもちろん最後尾、ノートPCを開いて板書をとる形式の現代の大学では最後尾は実質的な自由行動を意味しているのだ。まあ、最近は岡崎教授が最後尾にいるせいで半ば行動が強制されているところがあるが。いつもなら既に来ているはずの教授も、今日はまだ来ていない。

そして、始まるほんの1分前になって、早足で講堂に入ってきたのは——岡崎教授、1人のみだった。

最近代理だかですつと講義を受け持っていた董子さんの姿は、ない。

他の受講者は特段気にしている様子もない。この場にいる殆どの人間にとって彼女は、ただ岡崎教授の代理に過ぎないのだから。けど私は、彼女が自分の前に居ないことに、言いがたい違和感を感じていた。



「あの、岡崎教授」

目の前の情報を聞き流しながら、講義は終わりを告げ。私は奥で片付けをする岡崎教授に尋ねていた。他ならぬ、董子さんについて。

「今日は、宇佐見さん…董子さんの講義じゃないんですね」

「彼女は出張よ。といっても臨時講師みたいなものだから、私にも全然情報が入ってこないんだけど」

「はあ…」

「なんか、掴みどころがないのよね。受け答えくらいは勿論出来るけど、常にどこか上の空っていうか…そうね、夢を見ている感じ」

「夢…ですか？」

「夢遊病、とは言わないけど。研究者の端くれだから、私も似たようなものね」

そう言うと、彼女は鍵をひとつ私に投げて寄越した。慌てて受け取りながらも、首を傾げる。

「彼女の研究室の鍵よ。場所は…地図でも見れば分かるでしょ」
「え？」

「貴女の事だから、どうせ彼女に再レポートでも出されたんでしょ？メールで送るのが一般的だけど、彼女それ用のアドレスとか無いみたいなよ。だから出すなら、印刷して投げといた方が早いわよ」

言うだけ言って、岡崎教授はさっさと講堂から出て行ってしまった。ここに残っているのは、私だけ。

「……………」

レポートなど出されてはいない。つまり董子さんの研究室による理由は無いし、ならば鍵を返してさっさと帰るべきなのだ。

そうするべき、なのに。

気づけば私は、彼女の研究室の前にいた。

「…いやいや。用もないのに、こんな端まで来るなんて…」

我ながら馬鹿馬鹿しい。さっさと帰って、まだ陽もあるうちにメリーでも引っ張って喫茶店にでも行く方が建設的だ。

そう、踵を返したとき。ポケットから、端末の振動音が響いた。見ると、メリーからのメールだ。確か、今までに見た夢の内容を思い出しておいてくれと話したような。律儀にメールしてくるメリーらしく、そこには彼女が見たであろうものが列をなしていた。

折角だから、これらについて話をしようと、思い——

——私は、振り向く。背後には、董子さんの研究室が変わらずそ

ここに、ある。

——この研究室には、何がある？

再び踵を返し、手に持った鍵を差し込む。僅かに軋んだ音を立てて、ゆっくりと扉が開かれる。

——彼女は私に、何を見せた？

狭い部屋の中の、一角に。何かの資料とおぼしき書類が山積みの、小さな机がある。それに、そつと近づくと、

——彼女は、「あちら」から持ち帰ったと言っていた。ならば、ならば。

その机の、1番下。鍵穴のついた引き出しに手をかけて、引く。がち、と固い手応えがあり。

ただ、それだけだった。引き出しはゆっくりと、するすると中身を私に晒す。

——最大の手がかりが、目の前にある。

幻想郷縁起と呼ばれた書物が、剥げかけた装丁をそのままに佇んでいる。

これには、メリーが夢で見た全てのものが記されているという。のみならず、まだ見ていないものまでもが、この中にはある。それが今、私の手にある。

「……」

私はそれを、鞆に素早くしまい込むと。逃げるように研究室を後にしたのだった。

現世の眼

「……」

早足で家に帰り、鍵をかけてそのままもたれるようにして息をつく。肩掛けの鞆は、心なしかいつもより重く感じた。物理的な原因か、それとも心因かは、別として。

ふらふらと机に鞆の中身……幻想郷縁起を置く。董子さんの研究室から無断で持ってきてしまったもの。

「…持ってきちゃったものは仕方ない、わよね」

今から返しにいったところで入れはしまい。元々、ただ確認のために見たかっただけではあるのだ。メリーの夢と一致するものがあるれば、いやいつその本全部を写真にでも収めて、明日戻しておけばいいのだ。

そう考えると、疲労感もたちまち飛んでいく気がした。メリーから届いたメールには、紅い館の事やら屋台を営んでいる女の子やら、いくつか届いていた。

ともあれ、まずは中身を見てみない事には始まらない。私は早速、ぱらぱらと何度かページを捲り——すぐに、手を止めた。

「なにこれ……何も……」

何も、書かれていない。本のどこを見ても、何度見ても。全て、白。以前に見せられた様な中身は、何の痕跡も残さず消えてしまった。た。

「そんな……」

董子さんは、私がこうするのを分かっていたのか？私がおこれを取り来ると予感して、偽物を置いていったのか？あの本は……幻想郷とは、彼女がそこまでする程に危険だと言うのか。

白紙の本は、何も語らず。私はただ、項垂れるしか無かった。



目の前で、ぶんぶんと手が左右に振られている。見れば、やや呆れ顔のメリーが昼食を食べながら此方を覗いていた。

「大丈夫？目の下クマ出来てるけど」

「んー…寝れなくて」

あの後、すぐに本を放り出してベッドに倒れ込んだ私だが、やはりというべきか、一睡も出来ずに朝を迎えてしまったのである。おかげで無駄に大判な本と虚脱感を抱えて大学まで足を運ぶ羽目になってしまった。

「何かあったの？またレポート？」

「いやー…董子さんの研究室で面白そうな本を見つけたまでは良かったんだけど」

白紙の本をテーブルの上に置く。取り出した際に少しページをめくってみるが、やはり白紙だ。

「これはまた古い本ね…見つけたって、まさか勝手に持ち出したの？」

「いやあほら、すぐ返すつもりだったから…」

「バレたら大目玉でしょうね…それで？熱中してたってこと？」

「逆よ、逆。真っ白なのよその本。私が出るの、見透かされてたのかもね」

半ば諦めの気持ちで首を振る。メリーはといえば、最大の呆れ顔でため息をついていた。

「ちよつと、何よ」

「いえ、別に。好き勝手やるのは今更変わらなかったな、って」

「好き勝手って何よ！私だってちゃんと引き際くらいは分かってるわよー」

「引き際だけじゃダメでしょ…」

ぐうの音も出ない正論である。だが言い返すより先に、昼休みの終わりを告げる電子音が響いた。

「あ、時間…次のやつめんどくさいから早く行かなきゃ!」

話してばかりでろくに食べていなかった昼食をかき込み、鞆ごと器をひったくるようにして食堂の出口に向かう。

「ちよつと蓮子、コレ…!」

声に振り向くと、メリーが幻想郷縁起をぶんぶんと振っていた。出しっぱなしにしたままだったか、だが取りに戻るのも億劫だ。

「ちよつと持っておいて! 帰る時に渡して!」

「え、ちよつと…!」

面食らったようなメリーの声を背に食堂から駆け足で出る。岡崎教授の講義ほどではないにしろ、面倒な講義なので遅れるわけには行かないのだ。そのまま駆ける私の靴音が冷たい廊下に響いていた。

「幻想郷…妖、怪…? この人って…!」

夢想の瞳

蓮子が午後の講義に行ってから。

帰る時間になっても、私の前に現れることは無かった。私は部屋でベッドにもたれながら、蓮子が置いていった書物：幻想郷縁起をまじまじと眺める。

手がかり一つないと思われた私の夢についての、唯一の手がかり。だが蓮子は、これを何も書いていないと言った。そんな事はなかったというのに。

ぱらぱらとページを流し見していく。そこには、確かに内容が記載されている。人物とおぼしき絵が描かれたページや、何やら新聞のスクラップを挟んだようなページまで、様々に。見る限り、白紙のページなど存在しない。

「見落とした…わけでもないし。勝手に取ってきた罪悪感で…なんて感じも、蓮子に似つかないわよねえ」

蓮子は好奇心が先行してその他の感情など飛んでいってしまう様な性格だから、興奮状態にくらいはなっても本を白紙に見間違える程の狂いぶりは見せるまい。

「うーん…」

まるで分からない。分からない事をいつまでも考えるのはあまり良くない行為だ。ベッドに横たわり、蓮子から連絡が来ていないかを確認する。

連絡、なし。結局、今日は昼に話して以来一度も蓮子とは話をしていない。そんな日は、まるで新鮮に思える程に久しぶりでーどこか、不安だった。

大切なものは失って気づくとは飽きるほどに見聞きしたフレーズだが、なるほど確かに何度も繰り返したくもなる言葉だ。その言葉さえも流して来た私が、少し蓮子と話していかないだけで不安を感じているのだから。

もしかしたら。もしかしたら私が今見ていた幻想郷縁起も、そんな不安感が見せた幻覚なのだろうか？白紙だと言って肩を落とす蓮子を励ます為に、わざわざ中身があつたのだとー

そこまで考えて、止めた。今日の講義は面倒だとは蓮子も言っていたし、大方大きな課題でも出されたのだろう。明日になればきつと目の下にクマでも作りながら徹夜で書いたレポートを見せてくるだろう。時間にルーズなのは蓮子の特徴ではないか。

納得させるように頭の中の考え事を打ち切り、目を伏せる。暗闇に、視界が支配される。短時間高速での考え事の疲労感が、暗闇に沈ませる様にのしかかってくる。それに逆らわずに、私は眠りに落ちていく。

拭いきれない、小さな不安を抱えながら。



鳥がさええずる声が聞こえる。暗闇の中に、細々と刺すような明るさが混じる。もう朝かと重い瞼を開けると、そこにぼんやりと映つたのは木目の天井だった。

「んー…？」

寝ている間に私が攫われたりしていない限りは、夢だろう。だが今までは森の中など外に突っ立っているのがほとんどで、建物らしき場所に横たわっているのは初めてだ。とりあえず現状を把握する為、上体を起こしてぼやけた眼をこすり、完全に起こそうとして。

「あれ…」

ぼやけた視界が一向に晴れない。著しく視力が落ちてしまったかのように、かなりぼやけた風にしか見ることが出来ない。咄嗟に周囲を手で探るが、眼鏡のような感触には当たらない。晴れない視界にうるたえる私の背後で物音。振り向くと、嫌でも視界に入るのは輝くよ

うな金色。金の髪を伸ばしているとおぼしき人型があった。背中から金色が飛び出すように見えているが、そういう独創的なヘアスタイルだろうか。

「おや、お目覚めでしたか。珍しい日もあるものですね」

凜とした、よく通る声だった。そこまで離れていない筈なのに全く細部が伺えないが、どうやら女性のようだ。

「あ…」

「…どうされました？随分ひどい顔をされていますが。夢見でも悪かったのですか？」

「えっと…」

「とりあえず、身嗜みを整えて出て来てくださいね。朝食の支度は出来てますので」

そう言っ、彼女は踵を返して歩いていってしまった。背を向けると更に視界を金色が覆い、思わず目を逸らしてしまう。何をすることも視界を確保しなければ行けないだろう。

眼鏡やコンタクトレンズでも置いていないかと周囲を見回す。すると、視界の端に天井と同じ木目の色と、鈍い銀色が見えた。私の背丈ほどあるそれは鏡だろうか。ならばあれはドレッサーだろう。これ幸いと駆け寄ると私の姿もじわりと鏡に浮かび上がって来た。着た覚えのない寝間着こそ着ているようだが、それ以外に私に変化は無いようだ。不完全な視界の限りは、だが。

物色のために引き出しを開けると、求めている物の代わりに見覚えのある帽子が入っていた。私の帽子だ。もしかしたら私が目覚める前に先ほどの女性が私を見つけ、ここまで運んでくれたのか。手に取った感触も、私の帽子だー

「…」

手に布の当たる感触。見ると、赤いリボンか何か帽子につけられていた。いや、後からつけられたものではなく元からそうだった作りのようだ。ならば私の帽子では無かったか。

とにかく、目的の物ではない。帽子を戻そうとして、まだ何か入っているのが見えた。帽子を戻す代わりにそちらも手に取ってみる。真っ黒な、円形のそれは。

「これって、蓮子の……？」

シルクハットのような形状に、外周に沿うようにして巻かれ結ばれた白いリボン。見間違える筈もない、蓮子の帽子だ。だが、手触りが埃っぽい。長期間しまえばなしだった様な、そんなー

ずきりと、頭の隅に鈍い痛みが走る。脳の奥から、ちかちかと映像がフラッシュバックする。

蓮子が私に笑っている。

蓮子が、私に怒っている。

暗い空だけが広がっている。

私の手には、蓮子の帽子があつて。

ここの奥に帽子を深く、しまいこんでー

こんな映像、私は知らない。こんな記憶は、存在しない。なら、フラッシュバックしているのは？

限りなく近い距離で蓮子を見ていた、この記憶は、誰ー？



「…ッ!!」

けたたましいアラーム音で、飛び起きる。見慣れた天井、見慣れた部屋。

「夢…」

脱力し、ベッドに倒れ込む。夢の内容を、珍しく少しだけ鮮明に覚えてる。

普段見る夢ではなく、けれど愉快的内容ともいえない夢。嫌な汗をかいてしまった身体を洗うべく、重い足でベッドから立ち上がる。片隅にあった頭痛が、まだ残っているような気がして頭を押さえる。夢には考えていたことが出てくるというが、やはり昨夜は過度に心配をしすぎていただろうか。

「…馬鹿みたい、よね」

連絡がなくて不安だったなどと云ったら、蓮子がどんな反応をするか。意外にも真面目に聞いてくれるような、気もするけれど…それでも、正直に話すのは躊躇われた。

「元はといえば蓮子が帰りに来なかったせいなんだから、そこだけ聞けばいい話よね」

そうと決まれば、さつさと支度をしてしまおう。私を振り回すにつくき相棒を問い詰めてやるのだ。そう思えば、足取りは自然と軽くなっていった。

「どしたの、メリー？ひどい顔してるけど」

何故か私の家の前で待っていた蓮子は、開口一番そう言い放った。だが蓮子も、目元に薄いクマが出来ている。

「ひどい顔なのは蓮子だけよ。昨日は帰る時に来ないし連絡も寄越さないし、何してたのよ？」

「ええー、ホラー映画でも見た顔してたわよ、それもメリーには馴染みのない日本系のホラー…まあ良いわ。昨日はその、ね。面倒な教授から面倒な課題出されちゃって」

「どうりでクマがあるわけね。でも連絡くらいいくれても良かったでしよっ。」

「ごめんってば。今度力ニカマ鍋おごるから」

「いらぬわよ…。それより早く行きましよう、遅刻するわよ」

ほとんど予想通りの回答に、知らずのうちにため息が出る。やはり、心配しすぎだったか。無茶ではあるが、そこまで無理はしない性格なのは、私もよく知るところだと言うのに。

2人並んで見慣れた道を歩く。足音に混じって、隣から固い音がした。見れば、蓮子が小さな石を思い切り蹴り上げていて。

低く真つ直ぐ飛ぶ小石は、しかしすぐに地面の起伏に当たって大きく曲がってしまう。

なんの気なしに蹴り上げられたその石が遠ざかる音が、どこか耳に響いていた。

触れられないモノ

無音のまま、目の前のスクリーンに様々な文章や図が映し出される。それを要点だけメモをとる者もいれば、私のようにスクリーンごと写真に収めるだけで済ませるズボラな人間も多々いる。

ほどなくして時間を知らせる電子音が鳴り響き、スクリーンも消えてしまう。

時刻はお昼時。食堂で何か食べようかと考えていると、丁度蓮子から連絡が入った。

『食堂でカニカマ鍋注文したから、待ってるわよ！』

「……………」

まさかとは思うが、私の分まで注文しているのではあるまいな。全く味の想像がつかない上に、妙にお腹にたまらなさそうなフレーズに思わず食堂に向けた足を引っ込める。が、すぐにまた食堂へと歩き出す。外まで買いに行くのも面倒だし、蓮子に渡さなければいけないものもあるのだ。

昼時の宿命か、食堂はかなりの混みようだった。その人混みの奥に、もうもうと立ち登る湯気が見える。煙の細さから見るにどうやら私の分は注文していないらしい。適当に自分の昼食を頼み、すぐに出てきた盆を持って湯気の元へと向かう。周りにはそんなに湯気の出たつ物を食べている姿は見えないから、自ずと目印になる。

「お、メリー来たわね。…ってなんでご飯持ってるのよ」

「……………」

そこには予想通りに鍋を突く蓮子の姿。――そしてその正面には、

蓋のされた鍋が一つ、鎮座している。

「…私の分まで頼まなくても良かったんじゃない？」

「最初は一つでいいかと思っただけで、来てみたら案外小さめでね。これなら一人一つでも大丈夫だと思って注文したんだけど…」

確かに数人で囲む鍋に比べれば小ぶりなサイズでは、ある。あるが、手に持った一人分の昼食と一緒に食べるには少々どころかだいが無理のあるサイズでも、ある。というか。

「…カニカマ鍋って、以前食べなかつた？」

「前食べたのは半天然カニ鍋でしょ。半分カニで半分カニカマ」

「…じゃあこれは？」

「これは半分どころか全部カニカマ。値段も半額」

頭痛がして、思わず天を仰いだ。蓮子はどこか変わってる変わってると散々思ってきたし言ってもきたが、これはトツプクラスに変わっている。前回は確かなんとも言えない顔で私は食べていたはずなのだが、どうやら蓮子の頭の中からその事実はずっぽ抜けてしまったようだ。

とはいえ出されたものを残すのも褒められた事ではない為、恐る恐る蓋を開ける。以前の鍋よりもずっと強い人工の出汁の香りが立ち上る。くたくたになつたカニカマを、意を決して口の中に放り込む。

「どろろ…」

「…うーん」

どうと言われれば、出汁だ。煮込みすぎたのか大量に入れているのか、とにかく出汁の味しかない。妙に歯応えのある出汁をそのまま摂取しているかのよう。普通に食べられるのは出汁の偉大さゆえか。

「蓮子はもしかして味覚がおかしいのかしら？」

「失礼ね。限定ものだって言ったでしょ、メリーつたらそういうのに疎いんだから」

「ものが限定メニューでもこう毎日の顔見知りと食べてたらねえ…」

一瞬啞然とした後、蓮子はそっぽを向いてしまった。そんな彼女が

珍しくて、私は笑いながら眼前の鍋をつまんでいく。

「冗談よ。蓮子はいっつも私を知らない所に振り回すからね。毎度限定もの巡りをしている様なものでしょ?」

「…そうね」

まだそっぽを向いたまま、蓮子は答える。その後はお互い無言になり、けれど居心地の悪くない不思議な空気の中、昼休みは流れていった。

「つと、もうこんな時間。私はこの後も講義だけど、蓮子は?」

「私は何も無いわよ。本当はメリーを待って秘封倶楽部の活動と行きたい所だけど、天気がね…」

外に目をやると、ぽつぽつと雨が降り始めていた。食堂備え付けのテレビによれば夜にかけて段々強くなっていくそうで、流石に雨の中を歩き回る気は蓮子もないようだった。

「じゃあ、蓮子は雨がひどくならない内に帰った方が良いわね。どうせ今日も傘持つてないんでしょ?」

「う……。仕方ないでしょ、確率はそんなに高くなかったんだから…」
「そういつていっつも降ってるわよね。肝心なところで雨女なんじゃない?」

はあとため息をつきながら、鞆の中身を取り出す。底の方に置かれていた折り畳み傘を蓮子に手渡した。

「はい、これ。私は2本持つてるから1本蓮子に貸してあげる。振り回したりしないでよ?」

「さっすがメリー!メリーからの借り物を振り回したりするわけないじゃない、全く」

オーバーアクション気味に傘を受け取る蓮子。その様子を見てみると本当にチャンバラでも始めるのではと不安になってくるのだが。

と、鞆の1番下に置かれていた本が目に入った。そういえばこれを蓮子に返すつもりだったのだ。

「あとはい、これも」

「あ……」

蓮子から半ば押し付けられるように渡された本……幻想郷縁起を机の上に置く。中身が書いてあるだのないだのちよつとした騒ぎになった本だ。

「そういえばこれ、渡したまんまだったわね。……ねえ、メリー」

「何？」

「メリーはさ……この本に何が書いてあったか、見えた？」

「……」

「ほら、メリーの眼なら何か見えるかなーって、思つて……」

蓮子はこの本を、何も書いていない真つ白な本だと言つた。しかし私は、この本に中身があつた事を覚えている。けれど、聞いてくる蓮子の目は、ひどく不安がっている様に見えて……

「私も帰つて見てみたけど、真つ白だったわよ。それっぽい偽物でも持たされたんじゃないの？」

そう、嘘をついた。見えなかったのは蓮子だけでは無いと、言えれば良かった。けれど、そこまでは言葉が出て来なかった。

私の言葉に一瞬、蓮子は目を見開いて。

そうよね、と曖昧に微笑んだ。

case 4. 侵食する幻想

得たもの、失ったもの

「……」

不意に、目が覚めた。おぼつかない手つきで端末を操作すると、普段の目覚めよりはだいぶ早い時間だ。かと言って、二度寝をする様な性分では無い。

そんな訳で、私はすっかり大学に行く身支度を整え、けれど家から出ずに時間を持て余していた。

やる事が無い、という訳では無い。しかし、後回しにして何ら問題のない事しか無いのが事実だ。特に大した考えも無く端末でニュースを見て、それを右から左に流していく。完全に、今の私は暇人のそれだった。

「とは言っても、ね……」

ぴたりと端末を動かす手を止める。ぼーっとしていると、いつの間にか蓮子に電話かメッセージでも送ろうか……などと考えたのかアプリを開いていた。暫し悩んだ後、端末の電源を落とした。

蓮子のことだ、時間ギリギリまで寝ている可能性は高い。それに、起きていたとしてもマメに確認をするタイプでないのは充分すぎる程に知っている。

何よりこういう時に、いちいち頼ってしまうべきでもない、と……思う。以前、蓮子に同じ様な事を話すと不思議そうな顔をされたものだが、だからと言ってそう簡単に治るものでもなし。

どの道、私は蓮子と同じ講義がある訳でも、一緒に大学に行く義務がある訳でもないのだ。先に大学に行つて図書館にでも行こう、と私は玄関に向かった。

まだ薄暗い道を、一人で歩いていく。いつもと違う時間、人通りも殆どない。大学に近づけば私と同じ様な人種も増えるだろうが、まだ

先の話だ。私はただ、ぼうっと辺りを見回しながら歩いていく。と、

「……？」

不意に、視界の端に緑が映った。目を向ければ、なんて事のない人工林が広がっているだけだ。

その緑が、辺りと同じ緑であれば見逃す所だっただろう。その色は、この薄暗い時間にとっては明るすぎた。そして、何より。

その緑は、林の間がくり抜かれた様な穴の中で、ぽっかりと口を開けていた。

「穴……？」

丸い穴の中に、場違いな色が浮かんでいる。ぱっと見る限りはそれだけだが、それほど可笑しな事もそうはあるまい。少し近づいて、穴の中を凝視する。

見た目は森の様だ。ここで見ている人工林よりも鮮やかな緑ではあるが……それ以外はさしたる違いは見られない。違いを見つけないなら……この穴に、もっと近づくと他はないだろう。

逡巡して、私は穴から距離を取った。蓮子がいれば当然の如く中に入ろうとするに違いないだろうが、私一人でそんな事をする度胸はないのだ。

もし蓮子に連絡していたら一緒に見る事になっていたかも、などとぼやきながら踵を返す。今から蓮子に連絡したところで待ちぼうけは確実だろうし、秘封倶楽部の活動でそれはもうお腹いっぱいだ。

ぴしり。

背後から、音がした。

踏み出そうとした足を引っ込め、恐る恐る後ろを振り向く。

亀裂が入っていた。穴の周りに、不規則な線が走っている。その隙間からは、穴と同じ景色が浮かんでいる。

ぴしりと、音は増えていく。亀裂も、同時に走っていく。穴の向こうに、そんな事をする何かがいる訳でも無いというのに。

ぴしりと、また音がする。ぽっかりと空いた小さな穴は、今や視界の半分近くを覆う亀裂をその身から走らせていた。

もし、もしこの亀裂が増えたらどうなる？亀裂が入ったものは、いずれ割れてしまうだろう。

なら、これは。この亀裂が割れてしまったら、どうなるのだろうか――
―？

思わず、そつと後ずさる。頭の隅で、警鐘が鳴っている。もう一步、足を後ろにやったところで。

どすんと、何かに背中がぶつかった。

「何…!?？」

ぼつと体全体で振り向いた。そこには、

「いったあ…急にどうしたの、メリー？」

よろけながら肩で息をする蓮子の姿があった。

「…蓮子。もう、驚かさないでよ…」

「驚いたのはこっちよ。メリーったら、声をかけても反応しないと
思ったら、急にバックしてくるんだもの。何か嫌いなものでも見たの
?」

半目で睨む私に、蓮子もじとりと目を向けてくる。蓮子がここまで早く起きているのは驚きだが、見つかってしまったものは仕方あるまい。

「ええ、驚いたものならあったわ。その林に、穴が空いてたの。おまけにヒビまで――」

振り向いた先は、何ら変わらないいつもの風景。亀裂は元より、穴

まで綺麗に無くなった、ただの人工林が広がっていた。

「あれ…？」

「何も無いわね。少なくとも、私がメリーを見つけた時にも何も無かった筈」

息を整えながら、蓮子はそう言う。ならば、私にしか見えていないのか。あの音も、景色も。

「それよりメリー、探してたの！端末も繋がらないし家にも居ないし、探してたのよ？」

「端末？それなら…あっ」

電源を切ったままにしていた。考えてみれば、私が蓮子に連絡をする時に返事が遅い時はあっても逆はそう無かったかもしれない。蓮子からすれば殆ど考えていなかったのであろう事は、その息の乱れから容易に想像出来る。

「それで、どうしたの？貴女がそんなに慌てるなんて珍しいわね…」

「あのね、メリー。私も起きてから気づいたんだけど…」

完全に息を整える様に、ひとつ息を吸って。

「あの本…：：：幻想郷縁起が、何処にも無くなってるの！」

新たな事態へと、強引に引きずり込まれる事となった。

かつて、私は。

昔のことは、よく覚えている。

1 番楽しい時期だったと、そう言っても過言ではない。当時の私は、今とは似ても似つかないくらいに輝いていた。少なくとも、私にとっては。

今は？ 当然、そんな輝きを持つてはいない。長い時間放置された本が、こうして埃に塗れてしまうように。そつと、私は手で本の表面を払う。

「…幻想郷縁起」

こんなものは所詮創作に過ぎない、そう思う人が大半だろう。私や、まだ居るのかもかもしれないごく一部の例外を除いて。

本当なら、早急に処分すべきだと思った。だが、こうして手元に残してある。昔の輝きに縋っているかの様に。

「……」

今は、これを開く様な時間はない。何しろ、私は多忙な身でもあるのだ。そう、本に背を向けたところで。遠慮を感じさせないノックが、正面の扉から響いてきた。



「無くなってるって…どういう事？」

「私も信じられないけど…無くなってるの！ 確かにメリーから受け取ったのに、今朝鞆を見たらどこにも！」

どこにも、とは妙な話だ。本一冊、それなりに大きさはとる。万が一落としてもすれば流石に気がつくだろう。そもそも重さが変われば分かるものではないのか。

「いやあ…レポートがやばくて急いで帰ったのよね。正直気にする余裕が無かったっていうか…落としたりしたら流石に気づくけど」

「…つまり、蓮子の悪い癖がより悪い方向に転がったのね。それじゃあ、何も手掛かりが無いじゃない」

額を抑えながら、私はふるふると頭を振った。蓮子の話を信じるなら、私が渡してから蓮子が家に帰るまでの間に誰かに盗まれるなりしたという事になるが…。

「手掛かりなら、あるわ」

不意に、蓮子がぼつりつつぶやいた。

「あの本を持ってた人…董子さんなら、何か知ってるかもしれない」

董子：宇佐見董子。そうだ。あの本は元々、蓮子が彼女の元から無断で持ち出したものだ。

「言ったでしょ、超能力者だって言ってたって！忽然とものが消えるなんて変だけど、それなら」

「超能力で、って？」

可能性がゼロとは言わない。超能力が本当にあるなら、モノを移動させる事くらいは出来るだろう。しかしそれは、もし本当に超能力があればの話だ。私も…聞いた限りなら蓮子も、それを実際に見てはいないのだ。

「もしあの人が知らなくても、私達の他にあの本の事を知ってる人がいるとは考えにくい。無くなってるのに気づいたら、ほぼ確実に何か言われるに決まってるもの」

「…殆ど自首みたいに聞こえるけど、それだと」

「ちよっとした博打よ。それに、私はあの本をまだ見たいの」

「……見て、どうするの？」

思わず、私はそう蓮子に問うた。蓮子は、当たり前だと言わんばかりに。

「勿論、決まってるじゃ無い。秘封倶楽部として、あんな重要な手掛かりを放つてはおけないもの！」

相変わらずだと、私は苦笑するしか無かった。

研究室の付近には、誰もいない。まだ一限にもだいたい早い時間だ、無理もない。私達は、並んでドアを見つめていた。蓮子が、やや強めにノックをする。扉は、すぐに開いた。

「宇佐見さんに…ハーンさんね。オカルト関係の話は、前にも聞かれましたけど…」

気怠そうに話すのは、董子さん。私の知る、幻想郷で出会った彼女をそのまま順当に成長させた感じだ。少なくとも、見た目は。

外で話すのも、と室内へ促される。先に蓮子が入り、私が後からドアを閉める。

董子さんは、そつと振り向いた。その手に、本を携えて。

「きつと、聞きたいのは…これの事かしら」

…幻想郷縁起。私が蓮子に渡し、そのまま持ち帰ったはずのそれを彼女は、当たり前前の様に手に持っていた。

「…ハーンさんはともかく、宇佐見さんは幻想郷を忘れるつもりは無さそうだった。だからいつか、何らかのアクションは起こすと思っていたわ。まさか直接この本を持っていくとは思わなかったけど」

呆気にとられる私の横で、蓮子が口を開いた。ちらりと見えた顔は、信じられないという驚愕と。いつもの、猫のような好奇心も混ざっている様に、私には見えた。

「どうやって私から取り返したんですか。誰も私に近づいては、いな

かったのに」

「言ったでしょう、宇佐見さん。ハーンさんは知らないでしょうけど
：超能力が使えるから、よ」

手が、本から離れる。離れた本を、しかし視線で追わない。追う必要が無いのだ。種も仕掛けもなく、本はふわりと宙に浮かび。

「知りたいなら、話してあげる。私の見た、私が迷い込んだ幻想郷の話
を」

ばさりと、机に音を立てて落下した。